

42492

教科書文庫

4
810
44-1933
200030 2098

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

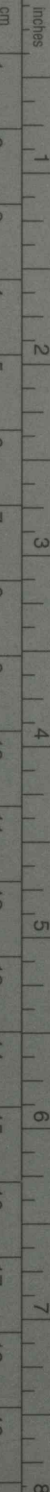


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
Fu10
資料室

國新國文
卷四



文部省檢定
昭和八年八月十四日 實業學校國語科

資料室

375.9
Fu10

東京帝國大學教授
文學博士 藤村作編

帝國



新國文

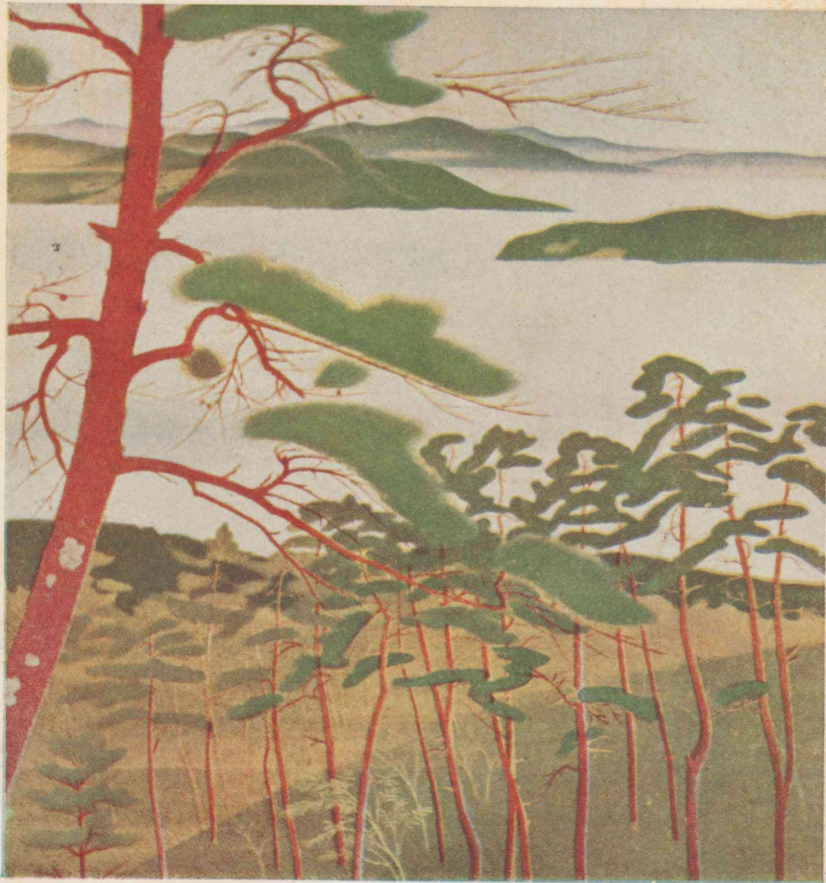


卷四

株式會社
帝國書院

廣島縣安藝郡中野村

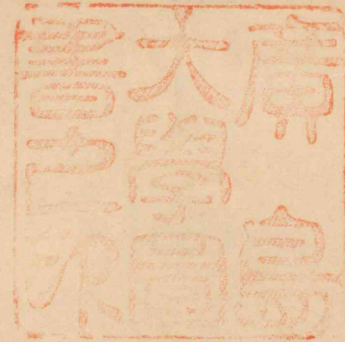
藤村作



(第一五課參照)

(筆 玲 口 山)

松



帝國新國文卷四

目次

- 一 武藏野の秋
- 二 四季
- 三 史傳を讀め
- 四 ● 曾呂利の頓智
- 五 ● エトランゼエ
- 六 ● 小さな旅人
- 七 路傍の草
- 八 老僧の接木
- 九 別れの握手(その一)
- 一〇 別れの握手(その二)

目次

- | | | | | | |
|---|---|---|---|----|---|
| 國 | 木 | 田 | 獨 | 步 | 一 |
| 佐 | 藤 | 春 | 夫 | 九 | |
| 大 | 町 | 桂 | 月 | 二 | |
| 湯 | 淺 | 常 | 山 | 二五 | |
| 島 | 崎 | 藤 | 村 | 二〇 | |
| 薄 | 田 | 泣 | 董 | 七 | |
| 相 | 馬 | 御 | 風 | 壹 | |
| 室 | 鳩 | 巢 | 園 | 四 | |
| 眞 | 山 | 青 | 果 | 四 | |

一

一一	桃山御陵
一二	幼き日
一三	慈母の追憶
一四	運動の精神
一五	●松と我が國の風景
一六	●生物進化の話
一七	●新月
一八	兩頭の蛇
一九	怖かつた話
二〇	篤實
二一	人物の大小
二二	●潜水艦の沈没
二三	日本新八景
	狩勝峠

田山花袋	二六
柳澤健次	二七
仲小路廉次	二八
増田義一	二九
市島春城	三〇
戸澤富壽	三一
北原白秋	三二
松平定信	三三
福澤諭吉	三四
橋南谿	三五
山路愛山	三六
福田一郎	三七
河東碧梧桐	三八

十和田湖
華巖瀧
上高地
木曾川
室戸岬
別府温泉
温泉嶽

泉鏡花	一四〇
幸田露伴	一四一
吉田絃二郎	一四二
北原白秋	一四三
田山花袋	一四四
高濱虚子	一四五
菊池幽芳	一四六

目次終



Doppo

名は哲夫
千葉縣の人
文學者
明治四十一年歿
(年三十八)

武藏野の秋

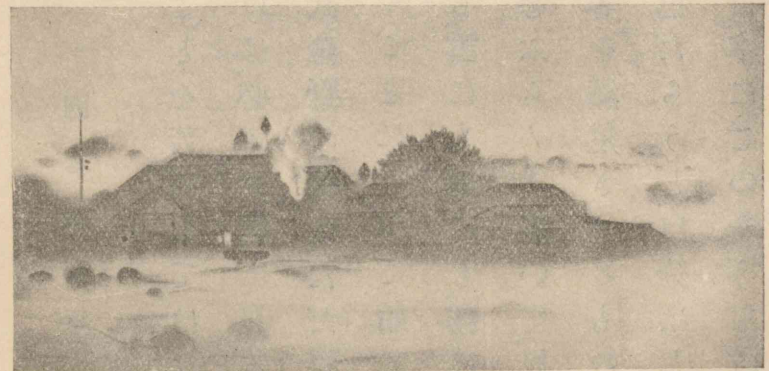
國木田獨步

武藏野に散歩する人は、道に迷ふことを苦にしてはならない。どの路でも、足の向く方へ行けば、必ず其處に見るべく、聞くべく、感ずべき獲物がある。武藏野の美は、ただ縦横に通ずる數千條の路を、當もなく歩くことによつて始めて獲られる。春夏秋冬、朝晝夕夜、月にも、雪にも、風にも、霧にも、霜にも、雨にも、時雨にも、ただこの路をぶら／＼歩いて、思ひつき次第に右し左すれば、隨所に我等を満足させるものがある。これが實に武藏野第一の特色だらうと、自分はしみじみ感じてゐる。武藏野を除いて、日本にこのやうな處が

那須野
栃木縣那須郡の
北方にある原野

何處にあるか。北海道の原野には無論のこと那須野にもない。その外どこにあるか。林と野とがかくもよく入り亂れて、生活と自然とがこのやうに密接してゐる處が何處にあるか。

されば、君若し一の小徑を行き、忽ち三條に分れる處に出たならば、困るには及ばない。君の杖を立てて倒れた方へ行き給へ。或はその路が君を小さい林に導くかも知れな



(筆雅光野狩)

武 藏 野

い。迷はず行き給へ。林の中程に到つて、又二つに分れたならば、その小さい路を選んで見給へ。或はその路が君を妙な處へ導くかも知れない。それは林の奥の古い墓地で、苔蒸す墓石が四つ五つ並んで、その前に少しばかりの空地があつて、その横の方に女郎花などの咲いてゐることもあらう。頭の上の梢で小鳥が鳴いてゐたら君の幸福である。すぐひき返して左の路を進んで見たまへ。忽ち林が盡きて、君の前方に見渡しの廣い野が展ける。足許から少しだけ下りになり、萱カヤが一面に生え、尾花の末が日に光つてゐる。萱原の先が畑で、畑の先に背の低い林が一叢繁り、その林の上に遠い杉の小杜コモリが見え、地平線の上に淡々しい雲

が集まつてゐて、雲の色に紛ひさうな連山がその間に少し
 づつ見える。十月小春の日の光が長閑に照り、小氣味よい
 風がそよ／＼と吹く。若し萱原の
 方に下りて行くと、今まで見えな
 景色が隠れてしまつて、小さい谷
 の底に出るだらう。思掛けなく、細
 長い池が萱原と林の間に隠れてゐ
 たのを発見する。水は清く澄み大
 空を横切る白雲の斷片を鮮かに映
 してゐる。水のはとりには枯蘆が
 少しばかり生えてゐる。この池のほとりの徑を暫く行く



武藏野の一部分（狭山の池）

と、また二つに分れる。右に行けば林、左に行けば坂。君は
 必ず坂を上るだらう。とかく武藏野を散歩するのに、高い
 處高い處と選びたくなるのは、なんとかして廣い眺望を得
 たいと求めるからで、しかも、その望は容易に達せられない。
 見下すやうな眺望は決して出て來ない。それは初から諦
 めたがいい。

若し君が何かの必要で道を探ねたく思ふなら、畑の中に
 ある農夫に聞き給へ、農夫が四十歳以上の人であつたら、大
 聲を揚げて尋ねて見給へ、驚いて此方を向き、大聲で教へて
 くれるだらう。若し少女であつたら、近づいて小聲で聞き
 給へ、若し若者であつたら、帽子を取つて慇懃イシギに問ひ給へ、大

様に教へてくれるだらう。怒つてはならない、これが東京近在の若者の癖であるから。

教へられた道を行くと、道がまた二つに分れる。教へてくれた道はあまりに小さくて、少し變だと思つても、そのまゝに行き給へ。

突然農家の庭先に出るだらう。果して變だと驚いてはいけぬ。

その時、農家でまた尋ねて見給へ。

「門を出るとすぐ往來ですよ。」と、^{あきうち}すげなく答へるだらう。農家の門を外に出て見ると、果して見覚えのある往來。なる



(筆柏太山石)

野 藏 武

ほどこれが近道だなど、君は思はず微笑を洩すに違ひない。その時始めて教へてくれた道の有難さが解るだらう。

眞直な路で、兩側共に十分に紅葉した林の四五町も續く處に出ることがある。この路を獨り靜かに歩むのはどんなに樂しからう。右側の林の頂は夕陽鮮かに輝いてゐる。をりをり落葉の音が聞えるばかり、四邊はしんとしていかにも淋しい。前にも後にも人影が見えず、誰にも遇はない。若しそれが木の葉の落ち盡くした頃ならば、路は落葉に埋れて、一足毎にがさ／＼と音がする。林は奥まで見すかれ、梢の先は針のやうに細く蒼空を指してゐる。猶更人に遇はない。愈淋しい。落葉を踏む自分の足音ばかり高く、

偶^{タマ}一羽の山鳩の慌しく飛去る羽音に驚かされる。
 同じ路を引返して歸るのは愚である。迷つたところが
 今の武藏野に過ぎない。まさかに行きくれて困ることも
 あるまい。歸りもやはりおほよその方角を定めて、別の路
 を當もなく歩くが妙。さうすると、思はず落日の美觀を獲
 ることがある。日は富士の背に落ちようとしてまだ全く
 落ちず、富士の中腹に群がる雲は黄金色に染まつて、見るが
 中に様々の形に變ずる。連山の頂には白銀の鎖のやうな
 雪が次第に遠く北に走つて、はては黯^{クモ}淡たる雲の中に没し
 てしまふ。日は落ちる。野には風が強く吹^ク。林は鳴る。
 武藏野は暮れようとする。寒さが身に沁む。その時は路

山は暮れて
 與謝蕪村の句



依^ヨあま^マ丈

和歌山縣の人
 文學者

杏花一孤村
 流水數間の屋
 夕陽人を見ず
 粘牛夢中に宿す

紀映淮

を急ぎ給へ。顧みて思はず新月が枯^カ林の梢に、寒い光を放
 つてゐるのを見る。風がいまにも梢から月を吹き落し
 うである。突然また野に出る。君はその時、
 山は暮れて野はたそがれの薄かな
 の名句を思ひ出すだらう。

—武藏野—

二 四 季

佐藤 春夫

水彩風景

杏^ア咲くさびしき田舎
 川添ひや家をちこち
 入日さし人げもなくて

麥畑にねむる牛あり

探 蓮

さわやかに風や日かげや

花はちす汀水打陽をつゝみ

見えもせて蓮はす探る子や

花がくれかたらふ聲す

秋の別れ

別れ路に雲湧きうかび

葉は散るよ峠の茶屋に

かなし人雁かりにあらねば

一つらに飛ばんすべなし

風日正に晴明なり
荷花州渚を蔽ふ
探蓮の人を見ず
只聞く花下の語を
端淑卿

別路雲初めて起る
離亭葉正に飛ぶ
嗟く所は人雁と異
一行に飛ぶことを
得ざるを
(七才女子)

霜下の草

若き命の束の間の

よろめき行くや老來おいとくへ

わが言の葉をうたがはば

霜に敷かるる草を見よ

「車塵集」より

年少まさ當に時に及ぶ
べし
蹉跎として日に老
に就く
若し儂が語を信ぜ
ずば
但だ霜下の草を看
よ
子夜



大町桂月

名は芳衛
高知縣の人
文學者
大正十四年歿
(年五十七)

三 史傳を讀め

大町 桂 月

青年はいかなる書物を讀むべきかとの御問に對し、卑見ヒク

左に申し述べ候。人は何人も摸擬性まねりと感染性かんせんせいとを有し居り候。而して一

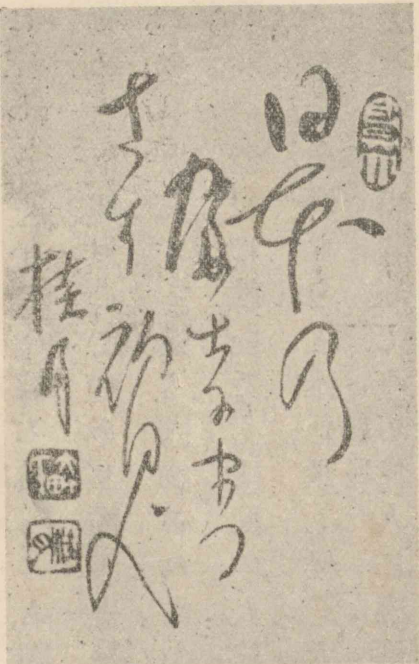
自分の方を
よく考へ

生中、この二性の最も熾なるは少年時代、若しくは青年時代に候。どちらかと申せば、まねをす模擬性は少年の方が強く、感染性は青年の方が強く候。君子に接すれば君子に感染し、小人に接すれば小人に感染し、豪傑に接すれば豪傑に感染し、小才子に接すれば小才子に感染するものに候へば、讀物の選擇もこれより割り出さざるべからずと存じ候。

この頃の青年の一般の缺點は、歴史傳説の知識に乏しき事に候。随つて今の青年は、聖人、君子、英雄、豪傑、志士、仁人、大學者、大宗教家、忠臣、孝子などに接することが極めて少く、随つて自然、人物が小さくなり、眼界が狭くなりて、神經のみが尖り申し候。これ實に國家百年の大患大患に候。故に小生は

大呼す、「請ふ大いに史傳を讀まれよ」と。

又一つ、今の青年に通じたる缺點これあり候。それは個人的若しくは孤立的といふ點に候。即ち前代と絶縁して、お



大町桂月筆蹟

のれ一代と思ふ者があまりに強く候。随つて、重厚雄大の氣風重厚雄大の氣風なくして、こせこせ、ちよこちよこする小人物が多く候。これも

史傳と親しまぬより起ることに候。史傳を讀まば、積善のにはその報としての吉慶あり、積不善の家に餘殃あり。家に餘慶あり、積不善の家に餘殃あり」といふことがよ

筆蹟
日本の富士にま
づさす初日哉
桂月

く解り申すべく、行がおのづから重厚になり申すべく、人物もどつしりとして参り申すべく候。

申すまでもこれ無く候へども、國家の盛衰興亡は、全く人物の有無如何にこれあり候。盛なる國も人物なければ忽ち衰へ、振はざる國も人物あれば忽ち振ひ申し候。我が國將來の發展に就いても、國民の人格を重厚雄大（めいじゆうゆうた）ならしむるが最大急務なりと確信致し候。人格を重厚雄大ならしむるには、史傳に親しみて偉人に感染するに若くは無しと存じ候。聖賢の遺著は史傳を歸納したるものに候へば、史傳と共に常に座右に置き、日夕絶えず讀誦（よみわた）なさるべく候。さらば卑怯鄙吝（ひせつびしん）の念次第に消えて、心が公明正大になり申す

べく候。文學も古きものは精神の香たかく人の心を淨化致し候へども、近時の文學物はやゝもすれば人を誤るもの多ければ、その選擇には深き注意を要すべく候。――新學生訓――

四 曾呂利の頓智

湯 淺 常 山

湯淺常山
名は元祿
岡山の人
天明元年歿（年
七十四）
太閤
豊臣秀吉

堺の鞘師始めて太閤に謁しける時、太閤「汝の姓名は何と申すぞ」と問ひけるに、對ふるやう、「臣が姓名は即ち曾呂利新左衛門と申し候。」太閤「さて奇なる姓もあるものかな。して、その曾呂利と申す姓には、何ぞ謂はれにてもあるか」と問はせけるに、又對ふるやう、「聊謂はれこれあり候。別にあらず、臣の拵（こしら）へたる鞘は堅くして、そろりと入り、敢へてつかへず、

是を以て曾呂利と申し候。太閤「こは奇なり。復折節來るべし」といふ。他日復太閤に謁しけるに、太閤問うて曰く、汝の



豊太閤 (筆郎太孝原長)

今又重ねて問ひ給ふ。故に、臣も亦殿下重問の意に従ひ、同じく重言を以て對へ候なり。」

新左衛門或時太閤に向ひ、願はくは一日御耳の香を嗅が

姓名は何とか申ししな。對へて曰く、曾呂利、曾呂利、新左衛門、新左衛門。太閤異しみてその重言を尋ねけるに、新左衛門の對ふるやうに、殿下先に臣の姓名を問ひ、

せられたし」といひければ、太閤はいふかしみ、こやつ又何をかなすらんと思ひしが、何はともあれ宜し。汝がよきに嗅げよ」と許されしかば、諸大名の御機嫌伺ひに出でたる時を窺ひ、太閤の耳根に口寄せて何やら言ふ體なれば、皆皆心中密かに驚き、かやつ何を言ふらん。もし我を讒言するものにはあらざるか。かやつは頗る殿下の寵愛する所なれば、かやつが言ふこと御用ひあらんも、亦測られず」と憂ひ、各わが邸に歸りて早々數多の金銀財寶を調へて、密かに曾呂利が方へぞ贈



曾呂利新左衛門 (筆親清林小)

りける。數日にして金銀財寶山の如く集ひければ、太閤の御前に出で、謝して言へるやう、殿下一日の御耳を拜借し、そのかうばしき香を嗅ぎたる功能によりて、金銀財寶山の如く集ひ來りて、殆ど坐するの餘席これなく候。これ全く殿下御耳の功能なり」とありければ、太閤も亦呆然として驚きけりとなん。

又或日の事なりしが、新左衛門太閤の機嫌を取り、頗るその功ありける程に、太閤何なりと汝の望むものを取らせんとありけるに、新左衛門の言へるやう、臣敢へて大なる望もこれなく候。唯紙袋二つほど米を賜はりたし。太閤そはいいと易き事なり。餘り寡欲の至りならずや」と仰せあり

けるに、新左衛門「これにて澤山なり」と申して退出しけり。やがて二つの紙袋を張抜き、數十人を雇ひ來りて、太閤の御前に出で、「前日御約束の米これに賜はりたし」とて米倉二戸前蓋うたりけるにぞ、さすがの太閤もこれには呆れて、少時何と云ふはなかりけりとぞ。言句もなかりけりとぞ。

又或日の事なりしが、嘗て太閤數多金銀の蟹を鑄造らせ之を庭の泉水、或はその近邊に放ちて娛樂となしけるが程、經て見厭きたりとして、近習の者に、「何ぞ一用を言出づる者にこれを與へん」といはれけり。皆々大いに喜び、臣は之を紙押になさん」と言ひ、或は「臣は金の茶釜の蓋なければ、せめては之を以てその蓋の取手になさん」と言ひ、或は何と言ひ、か

と言ひて、一個づつ賜はりしうち、新左衛門の乞ふやう、「臣は人間の角力も既に見厭きしことなれば、この蟹を集めて角力を致させんと存するなり」と言ひければ、太閤「角力とありては、五個や十個にてはその興薄かるべし、悉く持行くべし」と、残れる蟹を皆新左衛門に與へけりとなん。
——常山紀談——

五 エトランゼエ

島崎 藤村



島崎 藤村
名は春樹
長野縣の人
文學者
エトランゼエ
外國人の意

エトランゼエ——といふ言葉は、遠く東洋から旅して來たものの胸に、一種言ひ表し難い響をもつて迫つて來ます。東京の方で、銀座通りなどを歩いて居る西洋人を見かけると、「あ、異人が通るな」とよく自分で自分に言ひましたもので

す。さう言つた自分が當地へ來て見ると、丁度反對の位置に立つことを感じます。今は、私の方が異人です。

「彼處に立つて居るのは支那人かねえ——なあに、ありや日本人だ。」

船着場などで、何處の旅稼ぎの夫婦者かと思はれるやうな西洋人から、かういふ侮蔑あなづきした言葉を、しかも言葉が通じないと思つて、自分の鼻の先で交換されるのを聞いた時は胸が悪くなりました。

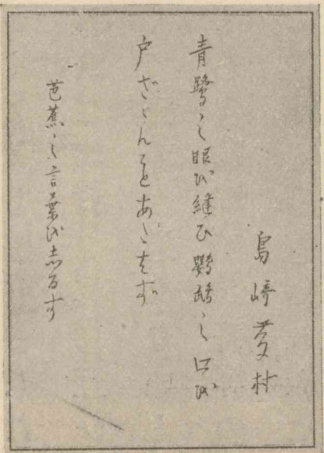
私は日本を出る時に、ある友人から、佛蘭西フランスの人は、ゴウル人と言つた昔の時代から、外國のものを優遇やさしくあつたして、種々な土地の話話をを聞くことを好んだ人種だ、と聞いて來ました。船

に乗つて見、港に着いて見、この都會に来て見ると、成程、あの友達の言つたやうに、佛蘭西人が外國のものに對して寛大で、そして慈悲深いといふことを思ひます。しかし、どれだけ日本が外國の人達に知られ、どれだけ日本人の性質が、理解されて居るかといふことを考へると、實に心細い。

日露戦争以後、日本の位置が非常に高まつたといふことは、外國に住む同胞からよく聞かされる言葉です。これといふのも、皆戦争のお蔭だ、それもよく聞かされる言葉です。けれども、戦争以外に何一つ日本人の誇るべきものが有るか、何一つ好いものが有るか、左様いふ言葉が同胞の口から出るのを聞く度に、これほど、自分で自分を卑しむ心を持つ

た人達が居るかと思ふと、腹立しくなります。かういふ人達の眼には、今日迄の日本の青年が、何程の努力をして來たか、といふも好くは映らないし、又過去に於て、自分等の先祖

筆蹟
鳥崎藤村
青鷲の眼を縫ひ
鸚鵡の口を戸さ
さんことあたは
ず
芭蕉の言葉を
しるす



鳥崎藤村筆蹟

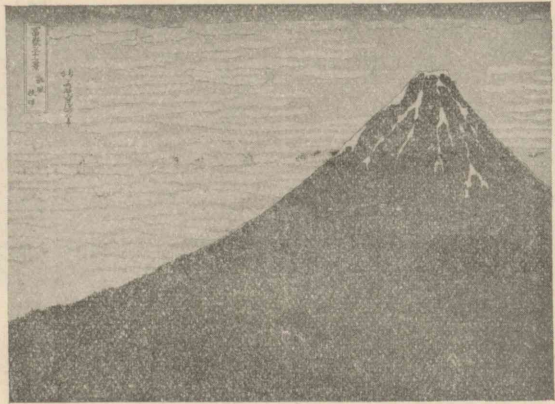
がどういふ精神を持ち、どういふ教養を重ね、どういふ産物を遺して置いて呉れたか、といふことすら眞實に映つては居ないのだと思ひます。自分等の

同胞の中にすら、平氣でかういふことが言はれたり傳へられたりする。まして生麥事件あたりからの攘夷の記録を讀み、乃木大將の自殺を新聞の上で知り、歌舞伎の芝居を見

て、腹切」と日本人とを一緒にして聯想するやうな、一般の歐洲人の眼に、如何に自分等が映ずるかは、思ひやられます。私は異郷の客となつて見て、今更のやうに、藝術の尊さをつつくゝと感じました。そして、異人種と異人種とが眞に互ひに理會し、眞に互ひに美質を知り合ふのに、藝術ほど近くて正直な道はないといふことを、しみじみ感じました。もしも、歐羅巴が吾等の先祖の胸には、恐ろしい幽靈のやうな「黒船」と聯想されたことも有つたやうに、唯、物質的の威力を以て迫り来るやうなもので、露西亞の文學も傳はらず、獨逸の音樂も傳はらず、佛蘭西の繪畫も傳はらずとしたら、どんなものでせう。歐羅巴人といふものが、眞實に吾等に解

つなぐんか

北齋 葛飾氏 浮世繪師 嘉永二年歿
歌麿 喜多川氏 浮世繪師 文化三年歿
廣重 安藤氏 浮世繪師 安政五年歿
ハーン ラフカチオーハーン 歸化して小泉八雲といふ 英文學者 明治三十年歿
ロチイ ビエールロチイ フランスの學者



(筆齋北飾葛)

つたのは、彼等の藝術が知られてからでは無いでせうか。これは吾等に對する歐羅巴人の上にも言はれると思ひます。假令極く少數にせよ、吾等を解して呉れる外國人は、北齋や、歌麿や、廣重の繪畫を通じ、ハーンやロチイの書いた物語を通じて、いくらか吾等のことを知つた人達です。

ある露西亞人が私の友人に、露西亞といふものが、歐羅巴に知られたのも、自分等の藝術が知られてから後のことだ。」と話したさうです。日本が戦争でばかり世界

に紹介されて、それをまた唯一の誇りとするやうな、同胞の多い間は、私達は、歐羅巴へ來ても、まだく、幽靈のやうなものです。生き、愛し、死ぬる私の血もあり、肉もある正體は、眞に親しみを以て知られないのです。私達はまた歐羅巴人と、眞實に心の顔を合せて居ないのです。

故人二葉亭四迷が、文學は自分の眞本領では無い、と言つて故國を去つた後でも、日本と、露西亞とを藝術で結びつきたい、といふやうな考へを有つて、二三の翻譯に着手したと言はれて居ります。露都の客舎に、晩年の日を送つた、あの人の生涯が偲ばれます。

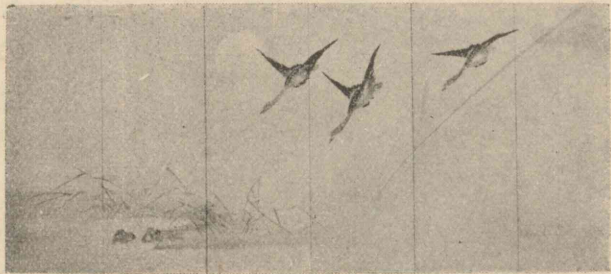
—海へ—



泣菫は號
岡山縣の人
文學者

六 小さな旅人

薄田 泣菫



(筆谷桂條下)

雁 私たちが七つ八つの頃には、そろそろ秋が更けて來ると、晴れきつた空を毎日のやうに雁が渡つた。私たちはそれを見かけると吹きさらしの野路に立つて、空の一方を振仰ぎながら、

雁よ棹になれ

棹になつたら鈎になれ

と、その長い行列が次第に雲の中にじみこんでしまふまで、聲を嗚なして叫んだ

ものだ。が、いつの間にか雁も少なくなつて、今では晝間その長い列が空を渡ることは、よく／＼人氣遠い野原かどこかでないと、滅多に見られなくなつた。その頃は又、後の岡に行つて百見ると、葉の落ちかゝつた雑木林に小鳥が澤山来てゐたものだ。舌小鳥といふと、私は海などを越えて来る彼の小さな旅人のあわただしい旅を考へて、いつも言はうやうのない淋しい旅心地を覚える。



まづ百舌が来る。秋の彼岸が過ぎてそろ／＼日影が黄

色がかつて来ようといふ頃、私たちはどうかすると暖い日の午過、そこらの木立で甲高い鋭いその聲を聞くことがある。「あゝもう秋だな」と思はず振返つて見ると、矮小な櫟にまじつて、ずばぬけて丈の高い楡の木に百舌が一羽止つて、黄色い夕陽を受けて、羽が金のやうにきらきらしてゐる。私たちはその瞬間、言はうやうのない強い健かな氣持が胸に流れるのを覚える。

次には鶺鴒が来る。山家の午過、たるさうな蟋蟀の聲もいつの間にか止んで、枯葉一つ寝返を打つ音までがはつきりと耳に入る静けさの底に、どこやら窸れた人の溜息とでもいつたやうな、微かな聲が洩れて来て、何の音ともわからな

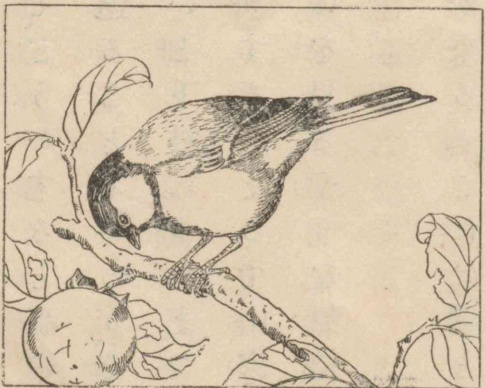
い。すると、樹蔭の萋畑かどこかで、餘念もなくせつせと仕事に精出してゐた農夫がひよいと顔を擧げる拍子に、すぐ



鶉

鼻先の小枝から、枯葉のやうな小鳥がついと身をそらして逃げていつてしまふ。それが鶉だ。鶉といつたら、まるで悲哀を抱いてゐる人のやうに、大抵は連に離れて唯獨りで出て来る。そしてそこらの小枝に止るなり、何か眼に見えぬ昔馴染ゆかりでも招くやうに、ひよくりひよくりと軽い御辭儀をして、さゝやくやうな聲でうたひ出す。私はそれを見ると、他の爲、世の中

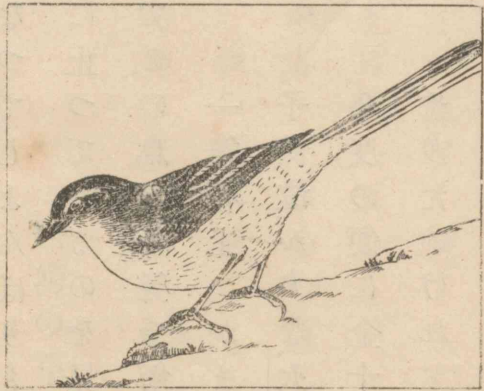
の爲といつたやうなわけがなく、自分一人の爲にうたつて、それで満足してゐる人たちを思ひ出さずにはゐられない。鶉が來てももの十日も絶たぬ間に四十雀が來る。この鳥は鶉と違つて十羽も二十羽も群をなして來る。山から里へ移る折などには、時雨でもするやうに、細かい羽音がさつと空を掠めて聞える。そしてそこらの木立におりるなり、めまぐるしいほどすばしこく雀の鬢たてなどを啄くきまはしながら、鼠色の背をそらし、柔かみのある圓い胸を見せて、銀の鈴をふる



雀 十 四

やうな透きとほつた聲で早口にしゃべり続ける。で、かうした大層な群の中には、きつとまだ羽の伸びきらない、灰色の産毛そのまゝの雛兒が交つてゐて、どうかすると高い枝に止り損ねて、もんどり打つて宙に返ることもあるが、そこはまた慣れたもので、いきなりひよいと下枝につかまつて、ませた身振で樹肌のひゝを啄いたりする。まるで山家育ちの、すばしこい、きさくな魂たましいそのものを見るやうな氣持がする。

小雪がちらつく頃になると、鷓鴣が来る。これは鷓鴣と同じやうに大抵獨法師で、それもこつそりと附近を忍ぶやうにして来る。冬の初の午過、山近い田舎の小屋で、爺は炬燵



鷓 鷓

に潜り込んで、こくり／＼居眠をする。その側で婆さんはせつせと絲車を繰つてゐる。檐えんに吊した干菜の影が、煤けた障子に見すぼらしく映つて、時をりちつぽけな小鳥の影が、ちらついたりする。どうかして絲目が切れて、睡さうな鍾の音がばつたり止むと、こそ／＼と掛菜をむしる音がする。が、老人の耳にそんな音の聴取れようはずがない。婆さんは俯いたまゝ、また絲を紡ぎにかゝる。さうかうする間に、鳥は舌打をするやうな聲を立てながらひよい／＼と小刻みに籬マカキ

を傳つて、隣から隣へと狭苦しい物蔭を出たりはいつたりして移つて行くのだ。それが鶉ヒヨコである。冷たい雨のびしよびしよと降る中を、獨者の頬白が灰色の胸までぐしよぬれになつて、しよんぼりとそこらの木に止つてゐるのを見ると、私の國でこの鳥の啼聲を解いて、

一筆啓上つかまつる。

子供泣かすな、火の用心。

今度の便に金十兩

やりたいけれども、一文も御



白 頬

座なく候。

と言傳へてゐるのを思ひ出して、しみぐと世渡りのむづかしさと、旅心の寂しさを思はずにはゐられない。後の雑木林にこんな小鳥が来る頃になると、野にはもうそろ／＼鶉ヒヨコが來、鶉ヒヨコが來る。

— 畿内行脚 —

七 路傍の草

相馬 御風



名は昌治
新潟縣の人
文學者

小学校や、女學校や、中學校などの生徒たちの描いた花の繪を展覽會などで多く見るが、それ等の十中八九が、菊とか、ダリヤとか、朝顔とか、コスモスとか、薔薇とかいつた様など、ちらかと言へば、觀賞用といふ型にはまつた花を寫したり

描いたりしたものであるのには、何時も、もの足りなく感じさせられる。私たちは、何もさうした種類の花を描く事その事に、不満を感じる者ではないが、しかし、少なくとも田舎に生活してゐる子供たちには、さうした型にはまつてゐる花より以外にも、つとく、美しい花があるべきはずのやうに思はれ、その點が不満に感じられてならないのである。

特に觀賞の爲に一般的になつてゐる花の美しさは言ふまでもない。しかし、さうした種類の花の外に、わけて田舎では山にも、野にも、背戸にも、路端にも、數限りなく美しい花が咲くのである。

そしてそれ等の多くの花は特に注意しないまでも、田舎の子供たちの心を養ひもし、楽しませもしてゐるのである。それであるにも拘らず、彼等の大多數は、いざ美しい花の繪を描かうといふ段になると、それ等の最も親しみの深かるべき花を除外するのである。私たちの不満はそこにある。

「この節の若い者は、草や木の名すらろくに知らない。私は嘗てかうした歎聲を、或山の村の一人の老人の口から聞いて、成程と感じ入つた事があつた。田舎に住んでゐる私たちに取つて、最も親しみのある草や木の名——それをすらも知つてゐる人の少ないといふ事は、何といふ情ない事であらう。毎日自分たちの往來する路端に、春に、夏に、秋に咲く花は随分多くある。そしてそれ等の雑多な草の花は、知ら

ず識らずの間に私たちの心に貴い養を恵んでくれてゐる。しかも私たちの多くは、それ等の名前すらろくに知つてゐない。児童をして出来るだけ深く自然と交らしめなければならぬといふ事を、口やかましく説いてゐる小學校の先生たちのうちにすら、さうした人が少なからずある。これ



はどうした事であらう。

かの森林生活で名高いアメリカの哲人ソローは、彼の毎日往來する路端の叢で、その日その日にどこで何の花が咲くかを、大概知つてゐたといふ事である。そしてエマースンはその一事に就いて、ソローがいかに自然を愛し、い

ソロー
アメリカ合衆國
の文學者・哲學
者
嘗てエマースン
の家に寄寓した
ことがある
(西紀一八二一—一八六三)

エマースン
アメリカ合衆國
の文學者・哲學
者
(西紀一八〇一—一八八二)

かに自然の現象に注意深かつたかを十分知る事が出来るといふ様な事を、賞讃してゐたとかいふ事である。私たちは其所までは行き得ないにしても、少なくとも毎日自分たちの往來する路傍に咲く花の美しさに心を引かれ、それ等の名前ぐらゐは知つてゐてもよささうなものである。



エマースン

嘗て私は芭蕉の

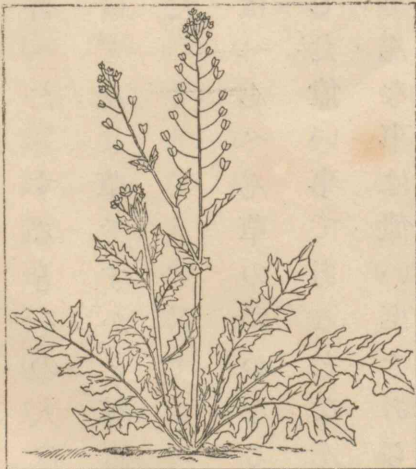
よく見ればなつな花咲く垣根かな

の句の中の「よく見れば」といふ言葉——一見説明的な冗語の様に見えるその言葉の、この場合に於ける力強さに就いて

こんな事を述べた事があつた。

「よく見れば」かう芭蕉が言つた時、彼は確かに一種の驚を覚えてゐたに相違ない。「成程」かうした驚あはれがその中に籠められてゐたに違ひない。いかにも「よく見れば」そこである。垣根の下土に何時となしに生えたあのへんべん草の様な、見る影もない雑草でさへ、人知れずつつましかうして生きてゐる。あの小さな草にさへ、春がくればかうして花が咲く。細やかな、何の品もない白い花が咲く。思ひがけなく、芭蕉がさうした自然の風物に心を引かれたのも、そしてその中に無限な興味を覺えたのも、思へば彼の所謂「よく見れば」の面影である。「成程」かう彼が

感歎したのも尤もである。恐らくその場合、芭蕉自らにあつても、その經驗によつて、平常の自分に、よく見ない時間の多かつた事の反省が起らないではゐなかつたであらうと同時に、「よく見る」といふ事の貴さを、彼は恐らく今更の如く驚歎せずにはゐられなかつたであらう。「此所だ、此所だ」と彼は思はず自分の膝を打つたかも知れない。所が、この芭蕉のかうした句を生んだなづなの花の、いかなる物であるかをさへ知らない人が多い。「なづなつてどん



なづな

な草ですか。かう、その話のついでに尋ねた人があつた。「べんべん草とも言ひます」と私は答へた。するとその人は折返して、「べんべん草つていふのはどんな草ですか」と尋ねた。私は呆然とせざるを得なかつた。

かう言つたからとて、何も私はべんべん草のいかなる物であるかを知つてゐる事が、大した偉い事であるとなんか思つてゐるのではない。だが、そんな事は偉い事であらうとなからうと、眞に自然を愛する人ならば、それぐらゐる事がわかつてゐてもよささうに思はれるだけである。

これは自然に就いてだけではない。人間に就いても同じである。

「あなた方が偉いと思つてゐる人の名を書いて御覽なさい。」

かういふ先生の間に対して、十中八九の生徒たちの書く名前は、大概きまつてゐる。無論さうした書物で教へられたり、先生から教へられたりした昔や今の偉い人たちの名を記憶し、それを書くのは結構な事である。しかし、さうした定評のある偉い人たちの多くの名の中へ、一つくらゐ自分自ら眞に偉いと實感した自分の手近な人の名がはいつても、よささうなものではなからうか。

私たちは、願はくは、見る影もない一莖の雑草に就いても、限らない自然の美と意味とを味はひたいものである。そ

してそれと同じ様に、自分のつい手近にゐる唯の人に就いても、限りない人間の貴さを感じたいものである。

其所に藝術がある。其所に宗教がある。

— 雜草苑 —

室 鳩巢

江戸時代の學者
享保十九年歿
(年七十七)

八 老僧の接木

室 鳩巢 集

忍が岡のあなた谷中の里に、某の院とて一つの眞言寺あり。翁いとけなかりし頃、その住僧を知りて屢寺に行きつ、木の實拾ひなどして遊びたりしが、住僧かたへの人に向ひて前住の時の事を語りしを聞きけり。
寛永の頃の事になん、將軍家谷中わたり御鷹狩のありし時、徒歩にてここやかしこ御過ぎがてに御覽まし〜ける

が、この寺へもおもほえず渡御ありしに、折節その時の住僧はや八旬に及びて、庭に出でて、みづはぐみつつ手づから接木して居けるが、御供の人々後れ奉りて、お側に二人、三人附き奉りしを、なかくやんごとなき御事とは思ひよらねば、そのまゝ、背き居たりしを、坊主何事するぞと仰せられしを、老僧心にあやしと思ひて、いとほしたなく、接木するよと御いらへ申せしかば、御笑ひありて、老僧が年にて今接木したりとも、その木の大きになるまでの命も知れがたし。それにさやうに心盡くす事の不用なるぞと上意ありしかば、老僧御身は誰人なればかく心なき事を聞ゆるものかな。よく思うて見給へ。今この木ども接ぎておきなば、後住の代

に至りて何れも大きになりぬべし。然らば林も茂り寺も
黒みなんと、我は寺の爲を思うてする事なり。強ちに我が
一代に限るべき事かは」と言ひしを聞召して、老僧が申すこ
そ實にも理なれ」と御感ありけり。その程に御供の人々お
ひ來りつゝ、御紋の御物ども多く集ひしかば、老僧それに心
得て大きに恐れて奥へ逃入りしを、御召出しありて物など
賜ひけりとなん。

—駿臺雑話—

眞山青果

名は彬

仙臺の人

文學者

新宿驛

東京市の西北

中央線・山手線

の主要なる驛

九 別れの握手 (その一)

眞山 青果

新宿驛構内機關車庫の一部。驛長の好意で、乃木家一族が保典送別の
ための使用を、特に許されたものである。

暗く煤びてがらんとした車庫内の一部に、紅白の幕を張つて一部を仕
切り、粗末ながらも椅子テーブルなど置く。

乃木保典軍服の上服を脱いで汁粉を食ふ。當時二十二歳、高崎十五聯
隊の小隊長である。乃木夫人静子の姉、柴貞子、その子晃子と共に給仕
する。夫人は幔幕の片隅にて、保典の鞆などを整理する。

保典(氣が付いて幌の蔭に聲掛ける) お母様、鞆には何も入りま
せんよ。戦馴れない者に限つて、荷物が多いんださうで
す。

乃木夫人の聲、幕の外より聞え來る。

夫人でもこんな穢れたシャツなどは、取換へて置きませう。
保典なあに、あつちへ行つて自分で洗濯しますよ。打遣つ

て置いて下さい。時に兄さんの汽車は今何の邊でせうね。

夫人 然うです、ね、今朝八時に新橋を發つたのだから、……もう彼此大阪に近いでせう。(幕をかゝげて入り来る)

保典 兄さんは今汽車の中で、このこの光景を想像して、いろいろと心に描いてゐますよ。僕も今朝八時に高崎驛の構内に集合してゐて、兄さんは今出發するな、なんて時計を見ていろ／＼考へてゐました。兄弟が同じ一日の朝と夜とに出征するなんて、無論偶然ではあらうが、僕は實に愉快に思ひますよ。

夫人 お父様も、それはお悦びになつてゐます。わしは留守

師團の腰引き猫ぢやが、佐々木梶原の若武者どもを先きに出して、先陣争ひの報告を待つてゐるなどと、珍しく御串戲など出ましたよ。

保典 お父様はきつと、僕を梶原に思つてゐるんだらう。僕

はそんなに狡くはありませんねえ、伯母様。

貞子 (笑つて) さあ……、慥に勝典さんよりは人が悪いよ。

保典 おやく／＼、こいつはいけない。

一同 笑ふ。保典も共に快活さうに笑ふ。

列車の方よりは、時々萬歳の聲聞え来る。

保典 (間を置いて又) 併し、お父様も早く出掛けたいんでせうね。夫人 この頃は何も仰しやらないが、那須ではかなり急つて

あられましたよ。

保典 (仰臥のまま、瞑目、暫く考へて、やがてどしんと拳にて卓面を叩き決然たる聲) 待つていらつしやい。

今にお父様を必要とする

時が来る。

時が来る。

夫人 (果物籠を引寄せ) 林檎でも剥

いて上げませうか。



乃木夫人

保典 うん、下さい。

静子夫人、林檎を剥く。

保典 そして兄さんのからだは。手紙に風邪を引いたとあ

つたが……。

夫人 もうすつかり良くなりました。動員令が下ると急に

氣力づいて、今朝出發の時などそりや元氣さうに見えま

した。

保典 (母の與ふる林檎を食しつゝ) 廣島へ着けば、四五日は兄さん

と一緒にだらう。大いに御馳走して貰はう。

晃子 保典さんは、食へることばかり考へてゐるのね。

保典 馬鹿にするな。腹が減つては軍がならぬ。昔からの

金言だ。

夫人 (保典の姿を見て) 保典さん、夜風が冷々して來ましたよ。

保典 え、時間もありません。そろ／＼用意ませう。

保典、伯母貞子、晃子等に取巻かれて、賑かに笑ひながら上衣を着け、軍装

を整へる。遠く萬歳の聲。

この時、將軍が馬丁鎌次郎をつれて入り来る足音聞える。

將軍(幕を掲げて保典を見て) 何だ、お前一人か。同僚はどうした。

保典(目禮して) 皆列車のなかに

乃木 居ります。

將軍 乃木が乃木の悴だけを送

軍 ると云ふことはない。呼ん

で御馳走せい。



保典 迷惑ですよ。お父様の前に来るのは、唯だつて苦しが
ります。

將軍 然うおれを片づけるなよ。は、は、は、鎌、列車へ行

つて呼んで来い。

鎌次郎走り去る。

將軍歩み寄りて保典の前に立つ。

將軍(低く嚴かなる聲) お前もいよいよ日本國民として御奉公

申上げる時が来た。父は悦ぶ。

保典(將軍の眞氣に打たれて、肅然として答ふ) はい。

將軍 用意覺悟、共に日常訓戒する通り、改めて言ふ迄もない。

心を健かにして、いつて働け。

保典 はい。

將軍(ポケットよりコップを出し) 恩賜の有難いお酒だ。今朝、勝典

にも頂かせた。お前も、頂戴して出發せい。

保典 有難うござります。(或方向に黙禮して、後コップを受ける)

將軍、葡萄酒を注いで與へる。保典、又黙禮して飲む。

將軍 そのコップはわしも頂戴したい。酌をしてくれ。

保典、コップを返して將軍に葡萄酒を注ぐ。將軍、恭しく飲む。

一〇 別れの握手 (その二)

保典の同僚なる青年將校石田・中原押尾・玉手轟の五人、馬丁鎌次郎に案内されて入り来る。

五人の將校は乃木將軍の姿を見て、幕の内に入りかねて躊躇して立つ。

將軍 お、皆來たか。何うした、入れ／＼。何を躊躇しとる。

石田 はい。國民の慰問酒で、皆少し……酔つて居ります。

將軍 結構ぢや。今日は構はぬ。

一同どや／＼と入り来る。

將軍 (欣然として青年將校等を見て) 併しどうだつた。今日各驛とも國民歡呼の熱誠ぶりを見て、どんな感じがした。あの萬歳の聲、貴公等の耳には何と聞いた。

轟 露骨に申しますと、死んで下さいと聞えました。

將軍 は、は、は、。(思はず聲高く失笑して) なる程な、然うも聞える。は、は、は、。然し、君等若武者は然う言ひ顯してはいけない。あの聲を聞くと、死なずにおられなくなる、この方が青年らしいよ。は、は、は、。(保典を顧みて機嫌よく) 乃木小隊長、お前も來て飲まぬか。

保典 はい。然し、私は……酒は困ります。

石田 (突然立上つて) 閣下、一同からお願いがございます。

將軍 何だ。

石田 われ／＼一同は、出でて再び生還する考はありません。國土に對して、今日を訣別と思ひます。就いては、閣下より一同に御餞別を頂きたいと思ひます。訓諭です。戰場に望んで、われ／＼一同の金言として體すべき、潔いお言葉を惠まれたいと思ひます。

將軍 うむ、好く氣がついた。上げよう、上げよう。(立つて歩みつゝ) 皆は坐つてゐるが、いゝ。咄嗟の場合で、餘り結構な金言は持合はさんが……、わしが青年時代に讀んだ葉隱

集の二三節を暗誦しよう。葉隱集は鍋島武士道で、佐賀藩あるを知つて、日本全國あるを忘れてゐる嫌がある。その點は不滿にも思ふけれど、非常時の武人思想としては、又取るべき點もあるだらう、聞いてくれ。

將軍目を瞑つて少しく考へ、又歩み出す。

植本富 植本豊

將軍 (やゝ節調をつけて) 武士道と云ふことは、即ち死ぬことと見付けたり。凡そ二つ一つの場合には、早く死ぬ方に片付くばかりなり。別に仔細なし。胸すわりて進むなり。若し圖にあたらぬ時、犬死などと云ふは、上方風の打上りたる武士道なるべし。二つ一つの場合に、圖にあたることのわかることは、到底出來ざることなり。我人共に等

しく生きる方が、萬々望むかたなれば、その好きな方に理がつくべし。

一同肅然として傾聴す。

將軍(歩みつゝ) 又曰く、凡そ武士たるものは、生死を離れざれば、何事も役に立たず。萬能一心といへば、有心の様に聞ゆれども、實は生死を離れたることなり。こゝに到つて、始めて、如何様なる手柄もなさるゝなり。兵法などは習はずとも、只敵前にては目を塞ぎ一足なりとも踏み込みて、敵を打たねば役に立たざるものと心得べし。終り。はゝはゝゝ。青年時代の諳誦をして、急に若くなつたやうだ。

この時、列車の方に集合の喇叭聞ゆる。花火の音。

將軍 おゝ、集合の喇叭だ。それぢや皆、用意せい。

轟 (少しひよろつきつゝ立って) 閣下、嘆願があります。

將軍 何だ。

轟 閣下。わたくしは臆病者に生まれたやうであります。戦地に行つて、卑怯を働く意志はありませんが、萬一その病が出ないとも限りません。閣下の不撓不屈な精神を私の肉體に頂戴して出發したいのであります。御許し下さい。

狂げて
おれが
あま

將軍 (相手の言ふ意味を解しかねて) ほう、そりや……。

轟 (すましてわが手を出し) 握つて頂きたいのであります。閣

下の精神が、わたくしの肉體に移ります。

將軍 (未だ心付かずに) ほう、然うか……。 (轟の手を握る)

轟 有難うございます。閣下より握手のお別れを頂きま

した。(跳り上つて悦ぶ)

將軍 (始めて氣が付き) あ、こいつ……は、は、は、。

一同、それを見て大笑。青年士官等は轟を突き除けて、僕も卑怯者です
「わたくしも臆病者です」などいつて手を出す。將軍笑ひながら、一同に
握手する。最後に保典、父の前に手を出す。

保典 お父様、僕にも。

將軍 (固く握つて二度ほど振り) 死ね、死ね。

その間に、家族一同は手にく提灯を取つて、見送りの用意をする。

青年士官達一列に整列して、將軍に舉手の禮を送る。

將軍 (禮を返しつゝ) 勇ましいの。軍歌を歌つて、威勢よく出發

せい。

一同家族に送られ軍歌を歌ひつゝ去る。後には將軍残る。提灯を取
り去りたるため急に暗くなる。月光霜のごとく降りそゞぐ。

將軍月光の下に立つ。軍歌の聲次第に遠ざかる。花火の音、萬歳の歡
呼……。

—戯曲乃木將軍—

一一 桃山御陵

田山 花袋

桃山の二つの御陵を拜して、私はいろくなことを考へ

た。



甲子花袋

名は録彌
群馬縣の人
文學者
昭和五年歿(年
六十一)

今を以て古を考へるといふことがあるが、實際私は、御陵

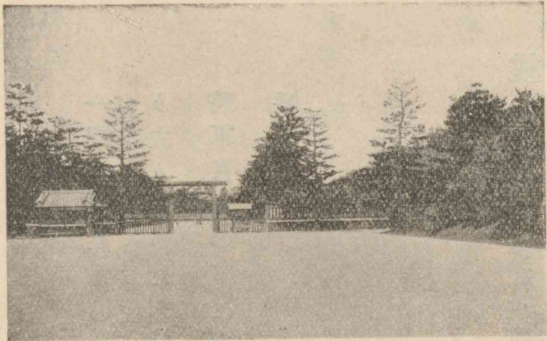
の前に額づいて、遠い昔のことまでも
取集めて考へずにはゐられなかつた。

私は天武天皇の御陵に、後から持統天
皇の御陵を合せたことを想ひ起した。

また柏原の御陵に、御子の嵯峨天皇が
涙を流して祈念されたことを想ひ起

した。それは、その大小はあつたにし
ても、昔はどの天皇でも、皆今日と同じ

やうにして、一つ一つその御陵を築かれたばかりでなく、そ
の當時の國民の悲嘆をも俱にその中に籠めて、埋葬された



柏原の御陵

天武天皇の御陵
大和國高市郡高
取村大字野口の
檜隈大内陵
柏原の御陵
桓武天皇の御陵
伏見山松原に在
る

のであつた。

しかるに、中世以後になつては、さうしたことは絶えてし

まつてあの京都の東山の南のはづれに近い泉涌寺イヅミノイヅミの中に
微かにその存在を示されるだけになつてしまつた。そし

て元からあつた一つ一つの御陵などでも、亡びた國の帝王
の陵でもあるかのやうに、全く顧られずに幾世紀かを過

した。中には、どれがどなたの御陵であるか、わからなくな
つたやうなものもある。つまり、それだけ國が衰へ世が沈

んでゐたのである。さうして置くべきものではないとい
ふことは、足利將軍も、信長も、秀吉も、家康も、またそれに續い

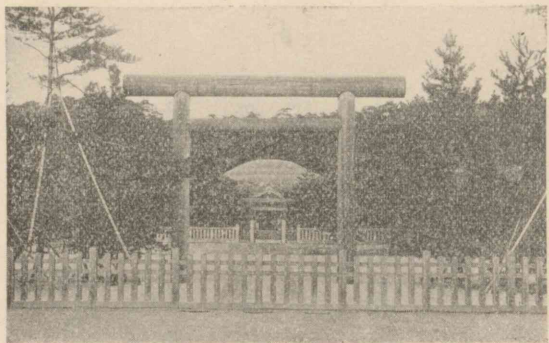
た後繼者も、みんな知らないことはなかつたのであらうけ

泉涌寺
開山は弘法大師
四條天皇を始め
後土御門天皇以
後歴代の御陵が
ある

れども、或は經營に忙しく、或は戰亂に追はれ、或は自己の驕奢に心も盲^{メクラ}ひて、そこまで手を出す餘裕がなかつたのであらう。しかし、長い間の歴史の波は、漸く大きなものを打出して來た。私たちは次第に闇い^ク歴史から、眼もきらめくやうな明るい方へと出て行つた。それを思ふと、維新の時に、山陵の荒廢に着目して、それによつて勤王の志を燃え立たせようとしたもののおつたことなども、見逃してしまふことのできない事實である。

桃山の御陵を參拜するものは、誰か我が大倭^{オホヤマト}の昔を思ひ出さぬものがあらう。千年にして始めてその昔に還されたその明治天皇の偉大な功業を。自ら^{ミツカ}戸を閉ぢるやうな

卑屈な政治の拘束^{カウマク}から脱して、飽くまで外へ伸びて行かうとしたその隆^{あきま}んな國運を。何等の好運ぞ。私たちは大倭



伏見桃山御陵

羽風が耳邊を掠^{カス}めて通つて行くのを聞き得るやうな心持

がした。

一二 幼き日

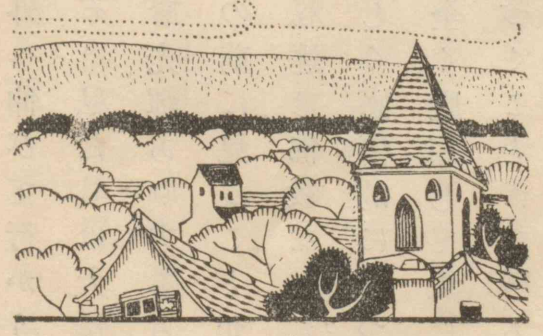
幼き日、ひとりして
 のぼりたる高き塔。
 窓ぎはに背伸びして
 遠方を眺むれば、
 赤き屋根、白き屋根、
 そのはては青き海。

柳澤 健

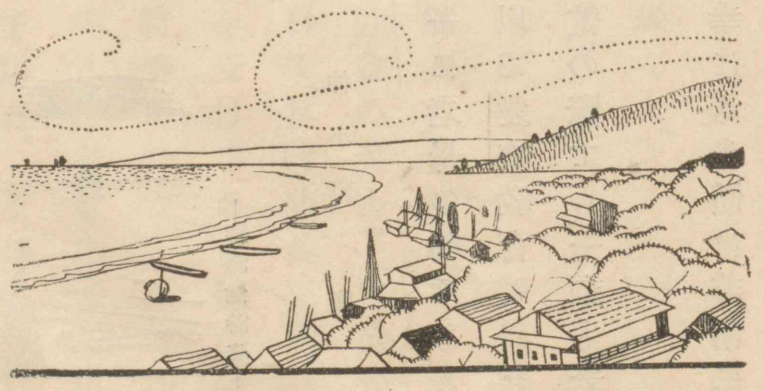
—花袋行脚—



柳澤 健
 福島縣の人
 外務省官吏
 詩人



黄金の帆のちろめきて
 わがこゝろさそひゆく。
 おもひいとほかなく、
 淋しみて佇むうち、
 いつしかに日は落ちて、
 風はさむく塔をうつ。
 その折よ、われは見き

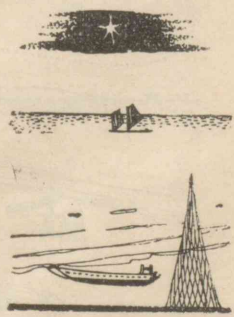


涙ぐむ眼して、

黄金色の星一つ、
海こえて燦キラメくを。

一三 慈母の追憶

仲小路 廉



—柳澤健詩集—



徳山市の人
元司法大臣
大正十三年歿
(年五十八)

不敏ながらも、余の今日ある所以は一に老母の賜である。全く艱難窮迫の中に、凜乎たる心情を以て愛撫教育された老母の賜である。余は如何に内外多忙の際でも、一刻も老母の事を念頭より去つた事はない。

老母は恰も七十七の高齡を迎へて、幸にも身體は非常に

壯健である。幾分でも老後を慰めようと思つて、過日親戚知人と共に心ばかりの喜字の祝意を表した。

去る三月、地方巡視の際、郷里徳山に立寄つた。久しぶりの歸郷であつたから、町の人達の溢るゝばかりの喜びに迎へられた。様々な郷里の思ひ出、暖な郷人の眞情は、とても言語に盡くし得ないが、余はその夜、歓迎會の席上で、自分が當地に生まれたのは慶應二年七月三日で、當時防長二州は非常な困難に面して居た。四境に敵を受けて、わが徳山の海岸に敵の侵入を見る事も計り難い時であつた。敵は四境に迫り、國中は鼎カシの湧くが如く、父は疾くに家を出でて軍に従ひ、一家は母の手一つで支へられて居た。その戦亂の

三條公
公爵三條實美
七 卿
三條實美・三條
西季知・四條隆
調・東久世通禧・
壬生基修・錦小
路頼徳・深宜嘉

最中、七月三日の午前四時に自分は出生したのである。即ち余はかゝる困難紛擾の時に生まれたものであつた。今日も徳山の海岸を逍遙して、三條公始め七卿の方々が上陸された史實を追懐した。觸目の勝は一つとして當年の事を偲ばせぬものはない」と申し陳べたのである。かく、余は生まれ落ちた時から一方ならぬ苦勞を母にかけたが、その後、十一歳の時父を失つてよりは、全く母の手一つで養育された。兄が浦和裁判所の小使となつて、窮困の家に漸く一脈の光明を認めしたが、それも東の間で、兄は二十一歳で異郷の露と消えた。十六歳の余は、母と十一歳の弟とたつた三人で、この世に

立つべき身になつた。天涯地角、頼る所なき落莫の境涯に落ちてしまつたのである。この境遇の中に、母は一少年の余を杖とも頼み柱とも頼んで、勧められた再婚を斷乎として斥け、唯一心全力を余の養育に注がれたのであつた。この間の慘澹たる母の苦心は固より言ふまでもなかつたのである。當時母の凜然たる決心に對しては、余は子供ながらも多大の感激に打たれた。如何なる艱難の中に立つても、常に前途の希望の光を感じ得たのは、全く老母が鞭撻の賜である。慈愛溢るゝばかりの母の溫情は、如何なる事に出逢つて

も、我が心を荒ましめず、常に唯一の慰藉となつて激勵したのである。而も老母の性質は寧ろ剛健で、暖い情を含みながらも随分手厳しい。躑をされた。手痛く折檻されたこともあつた。學問の上よりも、性格訓練の上に殊に嚴肅主義を取られ、假にも卑怯な行動は武士の家庭に恥すべき行として、斷乎として許されなかつた。

余が十二歳の時であつた。或時、五里許の路を學校から友達を同伴して、ふら／＼遊びながら宅に歸つて行つた。もう午後の四時過ぎであつたらう。すると、母は激怒して「今頃他所のお子様を、かういふ遠方まで遊びに同行して来て、それで親達にすむと思ふか。どんなに親御様が心配し

てゐられるか知れない。今から直に同行して歸れ」といつて、四時過ぎから再び五里の道を引き返させられた。母も同行して下さつて、三人は夜の田舎路を歩いたが、先方に到着した時は最早十二時過ぎであつた。友達を先方に送り届けて、再び母に連れられて歸つたが、母もかれこれ十里以上の道を歩かれた譯である。痛い足を引きずりながら、母の後に従うて眞暗な夜路をとぼ／＼と歩いた苦しさは、今もなほ忘れることが出来ない。

今以て強く母に感謝して居る一事がある。余が最初司法省の遣外法官として海外に派遣された當時の事である。調査の任務を終へて、同僚は皆歸朝する事になつたが、余は

この機會に、暫く私費で留學したい考で、豫め東京を出發する際に、母と妻とに、出来るならば相當の費用を準備して置くやうにたのんで置いた。官省の用務は一年間で終つたから、そのまゝ留學することに決心した。その年の暮に、母の手元から千圓の金をロンドンに送つて來た。その金を受取つた當時の自分の心中は、實に何とも言ひ難い感激に打たれた。當時余の年俸は千圓であり、又貯蓄もない身であつたから、母は余の不在の一年間に、萬事を節約して、これだけの金額を餘されたのであつた。

この老母の七十七の高齡を迎へて、益々健康である現在の喜びを味ふにつけて、綿々として過去の日が追憶されるのである。

である。

―仲小路廉集―

一四 運動の精神

増田 義一



増田義一
新潟縣の人
衆議院議員

近年全國を通じて運動競技の盛んなことは實に喜ぶべき現象である。運動競技は單に體育健康の爲のみでなく、元氣を養ひ快活なる精神を涵養するに與つて大に力がある。且その勝敗を争ふや正々堂々として、自然に公明正大の心事を修養することになる。卑劣の勝利よりも寧ろ名譽の失敗を喜ぶと云ふ意氣が運動競技に必要なのである。故に卑劣を戒めることは嚴重であらねばならぬ。英國の紳士たる資格中には何かの運動を爲すことを含まれてゐ

スポーツマンシップ
競技道

る位である。英國の紳士録を見るに嗜好として何かの運動をしない者は殆ど無い位である。英國人は運動競技を好み、従つてスポーツマンシップを尊敬する。彼等が勇氣に富み、卑怯なことが嫌ひであるのは、餘程運動競技の結果からも來てゐると思ふ。英人の運動は力一ぱい出して負けるか勝つか、ハッキリせねば承知せぬ。頗る負け嫌ひだが勝つたからとて喜んだ顔も見せず、負けたからとて不愉快な顔もせず、平然として済ましてゐる。この間に冷靜の修養を爲すのであらう。

スポーツマンライク
競技の道にかなつた

英國では、政治でも商業でもスポーツマンライクにやるから、立憲的で商業道德も進歩してゐるのである。スポー

スポーツマンシップ
運動家精神

ツマンライクに政治でも商業でも行へば、廉恥を重んじ卑劣を厭ひ、公明正大にやる筈である。我が國には運動競技が盛んになつても、その精神則ちスポーツマンシップが諸方面に現はれないのは甚だ遺憾である。我が國の缺點は何事も形式が整うて精神が打込まれぬにある。立憲政治の如きも形式は出來て四十年にもなるが、その精神は未だ徹底しない。外國から輸入した多くの文物が、皆その缺點があるのは實に残念に堪へぬ。今後は須らく、その缺點を矯正し且運動競技の根本精神たる公明正大の心事を、他の方面にも實現させたいものである。運動競技は紳士的にやらねばならぬことは第一義であ

るが、米國競技界の大勢も紳士的にスポーツマンライクに正々堂々と競争することになつてゐる。米國ではフェアプレーと云ふ言葉が最も盛んに用ひられてゐる。則ち公正なる遊戯と云ふことであつて、その根柢を潔白と云ふことに置いてある。潔白は公明正大にして苟も卑劣に陥らないと云ふことである。フェアプレーは英國人の重んずる所であるが、今日では米國に於て一層高く叫ばれ、優良なる學生は皆このフェアプレーを目標として、運動競技に加つてをる。先年インディアナの野球團が我が國へ來遊せんとした時、大統領はこの一行に對する送別の辭として、フェアプレーを主眼となせと云ふ意味を述べたとい

ふことである。フェアプレーは勝負を眼中に置かない。勝つても可、負けるも可、只立派に潔白に勝ち、立派に公正に君子的に負けよと主張するのである。この意氣精神が何より欲しいものである。

英のスポーツマンスピリット、米のフェアプレー何れもその根本精神は同一である。我が國の運動競技に於ても以上の精神を忘れてはならぬ。近來野球團などで選手を選ぶに、人格を吟味するやうになつたと云ふから、喜ばしいことである。運動競技は一面に於ては男らしい人格を養ふ目的も含んでゐるのだから、苟も選手となつて晴れの舞臺に出る者は人格劣等では問題にならぬ。而して運動

競技は總て公開的であつて秘密がなく、その心事や公明、その行動や正大、恰も立憲的理想選舉とその軌を一にしてゐる。選舉競争も運動競技の如くありたいものである。況して選舉が濟んだ後は光風霽月の心を以て、敵味方とも相接觸せんことを希望する。蓋し公明正大の心事を養ふ爲にも極めて好いことである。

— 運命の打開 —

一五 松と我が國の風景

市島 春城

市島春城
名は謙吉
新潟縣の人

我が國の風景畫には松が付き物である。是は我が國風景の特色が松の木にあるからで、廣重の東海道五十三次の圖などは、松の添はぬのは唯三枚だけである。そして松を

主として描いたのが殊に好い景色に見られる。



沙見阪の松(東海道五十三次の内) (廣重筆)

我々は餘りに松の風致に見馴れて、特にそれと氣が附かぬ様なもの、外來人に對して日本の風景を説いたり、又は日本の樹木中一番風致に富んでゐるものを擧げたりする場合には、第一に松の木を數へなくてはならぬ。若し我が國から松の木を奪ひ去つたら、世界に誇るべきこの蓬萊島の景勝も半ばその光彩を失ふであらう。外人觀光客が我が

國の風景の中で第一に目につくものは松の木であるといふのも當然であらう。

松が我が國の風致景色に第一位を占めてゐる證據には、庭園に於ける第一の飾り木として誰人も松を植ゑる。即ち我が國風景の理想には松の木が尊位を占めてゐるのである。これは日頃松の木の風景を多分に見てその美しさに憧れてゐるから、之を直ちに我が庭に取入れようとするのである。之を所謂三景に見るも、その二つは松の木の景色である。



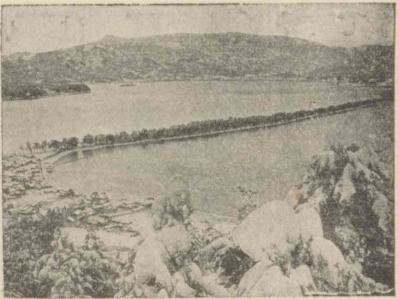
(筆觀大山横)

松

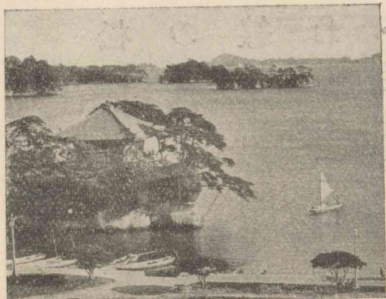
天の橋立
京都府與謝郡宮津灣の西側

松島
宮城縣松島灣中の島嶼

三保の松原
靜岡縣安倍郡舞子の濱
兵庫縣明石郡兵庫縣明石郡熱海
神奈川縣田方郡博多の公園
福岡市東公園



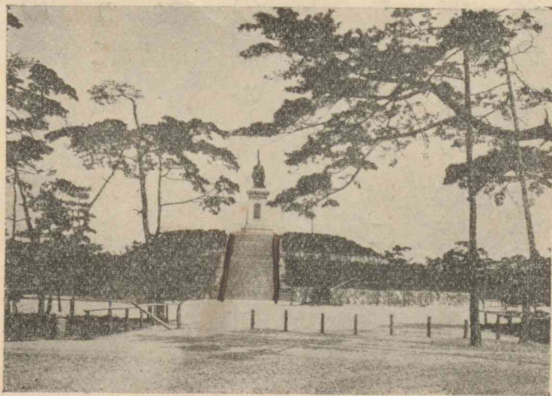
天の橋立



松島

天の橋立の景は、白砂の洲に翠滴る青松を連ねて出來た鮮明な風景であるし、松島の如きは、松その物から出來た景色である。昨今のやうに松島から鹽釜へ、小蒸汽船一時間の素通り見物では一向妙味もないが、和船の艚を押して八百八島廻りをして見ると、その島々が皆浮いて動くやうに見える處は、確かに無類の景色である。その他、三保の松原、舞子の濱、熱海の錦が浦、博多の公園等、皆松の景色である。

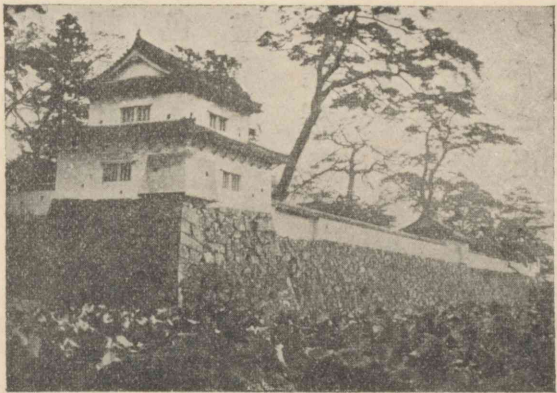
元來日本の景色は海岸に多い。そして海岸に育つ木は松に限る。四方海を環らして、白沙の長汀や、奇巖の浦曲から成る海岸線に、松が裾を端折つた形に身をくねらしてゐる姿態は、世界に類のない景色であらう。花は櫻ならば、木は松であらう。日本男子を櫻花にばかり譬へるが、之を松に譬へる事も、その節操の點に於て意味深いことであるし、日本一の名木を人格化する上に於て絶好な例であらう。



(多博) 園公東

ヤンビ

松の木の軀幹姿勢は剛健勇武で、曲りくねつてゐながらも更に軟弱の態がない。その枝ぶりに婉媚な處があるに拘らず、少しも浮華輕薄の處がなく、隆々とこぶ立つた幹が、頗る武張つた趣であるが、併し他の木の幹には見られぬ特色がある。そしてその葉は針の如く堅く、その深緑の色は畫筆で之を寫すに苦しむ深みがある。凡そ草木の葉で松の葉程に翠色濃厚なものはない、恐らく西洋繪具を以てしても、その生氣溢るゝ如き深緑を寫すことを難んずるであらう。そしてその風を受けて颯々たる松籟を起す趣に至つては、正に高士塵寰の外に超脱するの風がある。啻に庭園や、名を取つた景勝地に限らず、我が國には到る



松の壁城

處に松の木がある。全國を飾るものは第一に松の木である。海に山に、松の木を見ない處はない。又道路の並木、松堤防上の松、懸崖絶壁の松、城壁の松、寺院の松、何れも松の木の風致あるものである。庭園の如き、他に如何なる名木が有つても松の木がないと、本尊を缺く寺のやうである。庭園には、松が中心となつて權威を添へるのである。又城壁に植ゑた松は、濠の水に倒映して壯觀を添へ、又殺伐な城壘を風流な光景に柔らげる。松の木の間から三層

秋風ぞ吹く
 都をば霞ととも
 にたちしかど秋
 風ぞ吹く白河の
 關 能因法師

の高櫓を眺めるなど、いかにも雄大な感じを起させる。幾百年の老松亭々として高く聳え、蒼龍、斷礎の水面に偃して、封建時代の面影を偲ばしめるのは、懷古の美感に酔はしめるところが多い。江戸城は皇居とかはり、各地の城址は或は公園と化し、或は個人の邸宅となつてゐるが、松の翠は能く三百年の昔を語つてゐる。城址朽ち、石壘崩れて形を成さぬ處にも、唯堤上の松のみは、城の經歷を語つてゐるやうである。白河の古關址の如きは、今も石壘の一角僅かに存して清流に臨み、その上に蔦葛のからんだ老松があつて、風流を解せぬ旅客にも、尙秋風ぞ吹くと詠じた古人の詩境を髣髴させる。

又地方へ行くと、大邸宅の周圍を飾る多くの松の木は、都會のそれの様に烟塵を受けないから老幹益榮えて葉の光澤も一段と美しい。舊家の白堊の土藏の傍に枝ぶりの好い松が鬱然としてゐる光景は、如何にも堂々たる趣を添へてゐる。また田圃のあひだに一むら、こんもりとした鎮守の杜も、おほくは松であつて、松籟靜かに神樂を奏でてゐる。

又寺院の掃き清められた閑寂な庭に、松樹が地に這つて



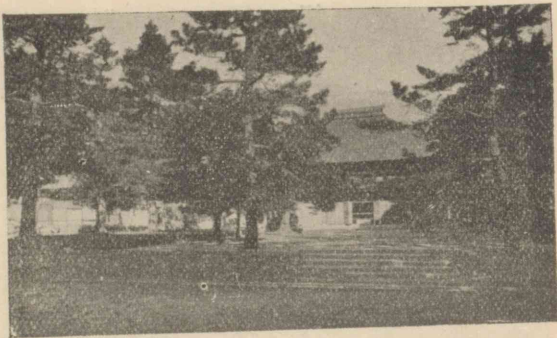
(筆門多内山)

松

芝三縁山
東京市芝區にある三縁山増上寺

上野公園
東京市下谷區

八幡社
神奈川県鎌倉の鶴が岡八幡宮
國幣中社



圓覺寺の松

長蛇をくねらせてゐるのも味豊かに見られる。殊に本堂の前に老松の鬱蒼と茂つてゐるなど最もよい。芝三縁山の門前の松林は、以前は今よりも十倍も風致があつて、樹蔭に縁臺が竝べられて、閑寂な趣味の掬すべきものがあった。上野公園の松も次第に煤烟の爲に滅びて行くのは惜しむべきであるが、猶隨處に櫻や楓と交つて巨人の如く老幹をくねらせてゐるのは、二百年の生きた歴史である。

鎌倉に遊ぶと、八幡社頭の立派な松並木、由井が濱邊の松

由井が濱
鎌倉の南にある
海濱

林など、荒い海風にもまれて梳つた頭髮のやうに靡いてゐる形が、蒼古たる覇府の面影に一段の風致を添へてゐる。建長寺・圓覺寺も松で風致が保たれてゐる。

東京・横濱の山の手で、緑蔭四隣を蔽ふ松林で圍まれた洋館の奥から、洋々たる樂音の洩れるなどは奥床しい。或は船板塀に見越しの松などいふ數寄な下町情調も、松でなくてはならぬ趣であらう。

山路を旅する折、老松の根に腰かけて涼風を納れ、仰いでその苔蒸した枝ぶりを眺めると、これを里に移したならばと、勿體ない程の氣がする。或は廢寺、無住の庵を飾る松、又は驛路の端に茶を賣る媪の貧しい茅屋を飾る松などに、捨て

がたい枝ぶりが多いものである。

更に松で名を取つた勝地でなくとも、老松の點綴によつ

て景色を活かしてゐる處は少くない。

嵐山の紅葉も、月の瀬の梅溪も、

熱海の梅園も、間に松を交へなかつ

たら、景色が單調になり色の配合が

調はないであらう。その他裾野の

小松原、用水地の周邊を飾る松林な

どは、海岸のくねり松に對して若々

しい素直な女松で、山には山にふさ

はしい松のすがたがある。高山の頂は、偃松で蔽はれ、その



嵐山

京都府葛野郡
大井川に臨む

月の瀬

奈良縣添上郡月
瀬村

松

偃



(筆 徳米田保久)

原松の保三

やはらかい葉が地上一尺二尺の高さに絨緞を布き詰めた形をなしてゐる。お山參詣者がその一枝を腰にくくり付けて歸るなどは、特殊な情趣であらう。かういふ風に、松はその土地と風景とに相應じた種類が育つて行くところに、一層の妙がある。

松は陽性で、礪確なる砂地をも厭はず、又熱烈灼くが如き日光にも怯げず、雪中に在つて愈々青々としてゐる。如何にも男性的で、百難に堪へる氣魄があり、風雪を凌いで勝利を

占める勇氣がある。世界中、我が國ほど松の木が多く、白沙青松の好風景に富んだ國はないのである。白扇倒まに懸る富嶽の麗姿も、三保の松原が添はなくては淋しいものであらう。

—春城隨筆—

一六 生物進化の話

戸澤 富壽



戸澤富壽

東京の人
生物學者
慶應大學教授
學習院教授

春の原野に美しい歌と麗はしい姿を現はすものは何と云つても聲高らかに唄ふ雲雀と、花より花へ飛び廻る蝶でせう。何れも翼をもつて飛ぶ。又、水ぬるむ池の邊りには鯉や金魚が愛らしい姿を浮べる。彼等は鱗をもつて泳ぐ。しかるに人類を初め、犬猫その他の獸は足をもつて歩む。

斯く様々な方法で、空中・水中・陸上のあらゆる場所を占領し、澤山殖えてゆく動物の種類は實に多いもので、約六十萬種と云はれてゐる。そして、その形と構造に至つてはまことに複雑である。

人類が未だ文化の歴史を築き上げぬ前に、既に自然は土地の中に自然の歴史を残した。吾々が想像することさへ六ヶ敷い長いノ、太古の時代に、やつとこの地球が火の塊より次第に冷えて下等の生物が棲めるやうな状態になつた時、小さい簡単な生物が現はれ、次で魚類も亦現はれたことが、自然の歴史に残る最初の化石である。勿論當時は未だとかげも鳥も獸も居なかつた。とかげの出たのは、それ

よりも餘程後であるし、鳥や獸は更に後になつて現はれた。馬は、最初兎位の大きで一本指の動物でしかなかつたことや、原始人類は充分言語を使へなかつたであらうことなど、凡べて化石に従つて研究された事實である。惟へば人類文化五千年の歴史は決して短くはないが、地中に残る化石を辿る自然の歴史は、實にノ、考へも及ばぬ長いノ、時の経過である。この間に生物は頗る多數の種類を現はして來たことを見れば、生物は進化するものであることを見捨てるわけにゆかない。

生まれたての赤子の體は澤山毛が生えてゐるし、枝にぶら下らせると二分間位は下る。そのありさまは一寸仔猿

と區別がつかない。また、犬や猫の仔が生まれるまへに發育の極く早いころ調へるとその形は豚の仔と區別がつかない。かやうに發育が早ければ早い程、種類が違つてゐても互によく似てゐるし、生まれた後でさへ、早いころにはやはり區別がつかない。實に、その動物の發育は丁度大昔から自然の歴史が見せてくれる種々な形態の變化や種類の増して來る結果を簡單に繰り反へしてゐるのである。この事實を見ても生物は進化するものであることを注意せずにはゐられない。

アフリカの原野に棲むジラフは脊が高くその上、頸が頗る長いので名高い。人間の首と比べて見たら何十倍ある

ことであらう。併し、ジラフでも人間でも皮をむき肉を取り去れば、何れも七個の頸骨が現はれる。更に頸の短い豚に於ても亦七個の頸骨が認められることより見れば、頸の長短に關係せず七個の頸骨をもつことは特に面白いではないか。又獸の手の指骨に至つても鯨も人も蝙蝠も根本に於ては違はない。これ等はある種の獸から夫々進化して頸や指が長くなつたり短くなつたりした結果に過ぎない。この事實を見ても生物は進化するものであることを認められる。

以上、化石・發生・解剖の三方面より生物の體を見れば、生物は下等より高等へ、簡單より複雑になつて多數の種類が現

はれ進化するものであることをうなづけるであらう。然らば進化は如何なる力によつて起つて来たか。これを説明するため樹立された學説が進化論である。その主なものを挙げれば、ラマーク學説、ダーウキン學説及びド・フリークス學説である。

ラマーク
佛蘭西の博物學者
〔西紀一七四一—一八二九〕
ダーウキン
英吉利の博物學者
西紀一八〇一—一八三三
ド・フリークス
和蘭阿姆斯特ルダム大學名譽教授
實驗遺傳學の大家



ラ マ ーク

哲學と云ふ書物を著はして學説を發表した。ラマーク學説を形づくる一貫した最も大切な點は、生物が體の一部を使用すれば發達し、使用しなければ退化し、かうして一代の

間に獲得した獲得形質が子孫に傳はつて、再び使用、不使用が繰り返へされて變化が起り、新しい種類を生ずるので、と言つてゐることである。従つてカマキリの前肢やバッ

タの後肢、ジラフや鶴の頸の發達したのは盛に用ひるためであるし、モグラの目の退化したのは用ひぬ結果であると云ふ。

ダーウキン學説は淘汰説と呼



ダ ー ウ キ ン

ばれる。彼は一八五八年にこれを發表し、翌年種の起原と云ふ書物を著はした。ダーウキン學説によると、凡ての生物は變化する性質をもつてゐるもので、これによつて現は

れた種々な變化が子孫に傳はる。その中、生存に適せぬものは自然の力によつて淘汰され、適するものだけが生存を續けて増殖するが、食物には制限あるためその生存してゐる者の間でも亦優勝劣敗の生存競争が起り、かくして自然淘汰が繰り反へされ此處に新しい種類が出来る。といふのである。従つて、様々な體色をもつバッタも、緑草中に於ては綠色のものが氣づかれず、枯草中に在つては褐色のものが生存に適する。又、木の葉に似た「木葉蟲」、「木葉蝶」枝に似た「枝尺取」等も亦自然淘汰によつて生存を續けられる。然し、「バッタ」、「木葉蟲」、「木葉蝶」、「枝尺取」等にも一層生存に適する色と形とがある筈だから、それらの間にも亦生

存競争が行はれ優勝劣敗の結果を齎すものである。

ド・フリース學説は突然變化説と呼ばれる。彼は一九〇一年より三年に亘つて、「突然變化説」といふ書物を著した。



ド・フリース

ド・フリース學説の要點は、生物體には「突然變化」といつて、急に新しい形質が造り出されるものだ。然もそれが子孫に傳はり自然淘汰によつて淘汰され、更に又それに突然變化が現はれ、かうして次々と新しい形質が出来ると云ふ。この突然變化で新しいものが出来るといふのが彼の説の要點である。

生物進化の事實は何人も否定出來ない。併し如何にして進化したかを説明する學說には、以上の如く主なものが三つある。けれども、その外にも澤山あつて進化の事實を無理なしに説明しようとして勉めてゐる。

↑子供の科學による

一七新 月

北原 白秋



也系を秋
名は隆吉
福岡縣の人
詩人

斷崖の松の木に

月ほそくかゝりたり。

ほそき月、

金無垢の月。
金無垢の月。



入海の波間にも

また月はしづきゆく。

沈々と

金の鈎。

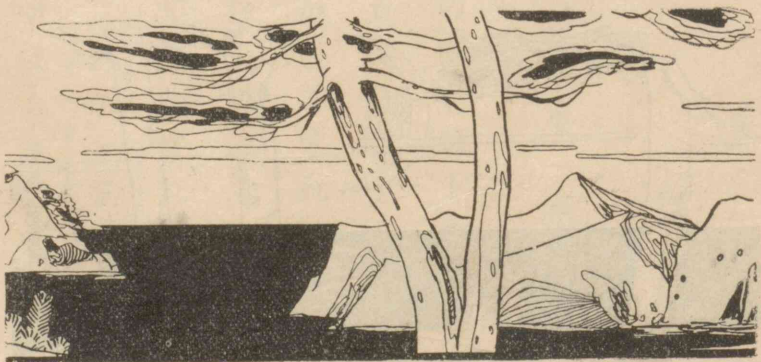
金無垢のするどさよ、

絹灑の雨ののち、

しんじつに

走りいづるその蒼さ。

嶋黒く、海黒き、



眞の闇。

舟ひとつ進みゆく、

その上に細き月。

なにかわかぬ

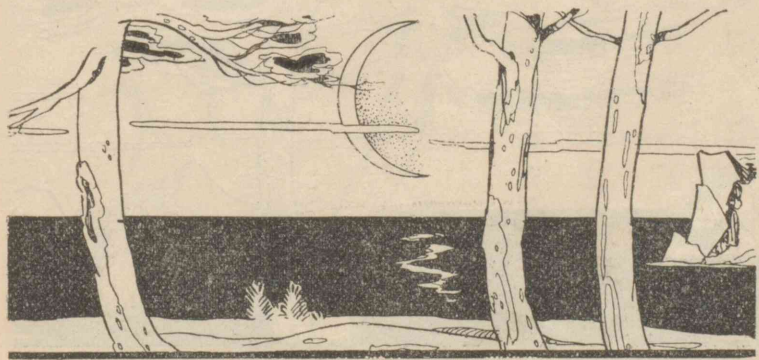
魚族は目をさまし、

鈴蟲は一心に鳴きしきる、

度つしきの極きはまり。
ごいんしやくな

闇の夜は斷崖、

かげわかず、ゆく舟も見えわかず。



たゞ光る細き月、
金無垢のほそき月。

—白秋詩歌選—

一八 兩頭の蛇

松平定信

松平定信
白河の城主
徳川幕府の老中
寶曆八年歿(年
七十二)

昔兩頭の蛇くづなはありしと聞けばとて、蛇の同じほどなるを捕へて、二つの尾をしかと結びて離れざるやうにして庭へ放したり。一つは南の方の叢むらさして行かむとすれば、一つは北の方の林へ入らんとし、屋敷の命どみに行かむとのみして、一つ所ところにのみ居けり。たはぶれに下り立ちて驚かすれば、いよいよ挑いみ合ひて、一つ處ところにをどり居けり。いかゞすらむと折い見たるが、三日ばかり経て、二つの蛇くづなやはらぎて心を共に

あはせ、尾のかたを繩の如くにして、頭を二つならべて行くにぞ、常のよりははるかに速に這ひ行きけり。げに人も心の一つなれば、目も耳も心に從ひて、見聞し、手足も一つ心なればこそかゝりけれ。もし一つ／＼の心ならば、右の手は左を凌ぎ、左は右をそねみ、手して取らんとすれば、足はよそへ行き、左は左に行かむとすれば、右は右へ行かむとして、一つも人の事足ることはあらじかし。さるに古より國のつかさたる者等、或はそねみ悪み、又は互に凌ぎなどして、ただに我が威をふらむとするは、何の心にかあらむ。國家のこ

とをよそにして、只我が身あることをのみ心とするにや。
心とするの心さう
かくては亂れざる國はあらじを、我が身にのみかゝづらひ
だけ考へて、

てその事を思はぬは、たとひ何の才あり何の力あるものとも、何にかはせむ。

—花月草紙—

一九 怖かつた話

福澤 諭吉



福澤諭吉
大分縣の人
慶應義塾大學創
設者
明治三十四年歿
(年六十八)
成島柳北
幕末明治の文章
家
明治十七年歿

維新前、文久三四年頃、江戸深川六軒堀に藤澤志摩守と云ふ旗本がある。これは時の陸軍の將官を勤め、極の西洋家で、ある日その人の家に集會を催し、客は小出播摩守、成島柳北を始め、その外皆昔の大家と唱ふる蘭學醫者、私とも合はせて七八名でした。その時の一體の事情を申せば、私は十三年間、夜分外出しないと云ふ時分で、尤も自ら警めて内内刀にも心を用ひ、能く研がせて斬れるやうにして居ます。

敢てこれを頼みにするではなけれども、集會の話が面白く、つひ／＼怖い事を忘れて、思はず夜を更かして、十二時にもなつた。

筆蹟

言是扶桑冠ニ海
東ニ國光須下與ニ
旭光一同ニ他山之
石取無レ盡 莫レ
惜十分攻レ玉功
贈ニ學生ニ



福澤諭吉筆蹟

所で、座中みな氣が付いて、さあ歸りが怖い、疵持つ身といふ譯ではないが、いづれも洋學臭い連中だから皆怖がつて、大分晩うなつたが如何だらうと言ふと、主人が氣を利かし

て、屋根舟を用意し、七八人の客を乗せて、六軒堀の川岸から市中の川、即ち掘割を通り、行く／＼成島は柳橋から上がり、それから近い者近い者と段々に上げて、仕舞に戸塚と云ふ老醫と私と二人になり、新橋の川岸に着いて、戸塚は麻布に歸り、私は新錢座に歸らねばならぬ。

新錢座
東京市芝區の町名

新橋から新錢座まで凡そ十丁もある。時刻ははや一時過ぎ、然もその夜は寒い晩で、冬の月が誠に能く照らして何となく物凄しい。新橋の川岸へ上がつて大通りを通り、自ら新錢座の方へ行くのだから、此方側即ち大通り東側の方を通つて四邊を見れば、人は唯の一人も居ない。そのころは浪人者が徘徊して、其處にも此處にも、毎夜のやうに、辻斬と

て容易に人を斬ることがあつて、物騒とも何とも言ふにはれぬ。それから袴の股立を取つて、進退の都合の好いやうに趣向して、颯々と歩いて行くと、丁度源助町の央なかばあたりと思ふ、向うから一人やつて来る、その男は大層大きく見えた。實はどうだか知らぬが大男に見えた。ソリヤ来た、どうもこれは逃げた所がおつ付かない。今ならば巡査が居るとか、人の家に駈け込むとか云ふこともあるが、どうしてどうして騒々しい時だから、不意に人の家に入られるものでない。却つて戸を閉めて仕舞つて、出て加勢しようなんと云ふものがないのは分り切つてる。「こりや困つた、今から引きかへすと、却つて引身になつて、追つ駈けられて後か

ら遣られる、寧ろ大膽に此方から進むに若かず、進むからには臆病な風を見せると付け上がるから、衝き當たるやうに遣らうと決心して、今まで私は往來の左の方を通つて居たのを斯う斜めに道の眞中へ出掛けると、彼方の奴も斜めに出て来た。こりや大變だと思つたが、もう寸歩も後に引かれぬ。いよ／＼となれば兼ねて少し居合の心得もあるから、どうして呉れようか、これは一つ下から刎ねて遣りませうと云ふ考へで、一所懸命「いざ」と云へば眞實に遣る所存で行くと、先方ものそ／＼遣つて来る。私は實に人を斬ると云ふことは大嫌ひ、見るのも嫌ひだ。けれども逃げれば斬られる、仕方がない、愈先方が抜き掛ければ背に腹は換へら

れぬ、此方も抜いて先を取らねばならん。そのころは裁判もなければ警察もない、人を斬つたからと云つて咎められもせぬ。只その場を逃げさへすれば宜しいと覺悟して、段行くくと、一步々々近くなつて到頭すれ違ひになつた。

所が先方の奴も抜かん、此方も勿論抜かん。所で擦れ違つたから、それを拍子に私はどん／＼逃げた。どの位足が早かつたか、覺えはない。五六間先へ行つて振り返つて見ると、その男もどん／＼逃げて行く。どうも何とも言はれぬ、實に怖かつたが、双方逃げた後で、先づホツと呼吸をついて、安心して可笑しかつた。双方共に臆病者と臆病者との出逢ひ、拵へた芝居のやうで、先方の奴の心中も推察が出来

る。こんな可笑しい芝居はない、初めから此方に斬る氣はない、唯逃げては不味い、屹と殺されると思つたから進んだ所が、先方も中々心得て居る、内心怖々表面颯々として出て来て、丁度抜きさへすれば切先の届く位すれ／＼になつた處で、身を翻して逃げ出したのは、誠にえらい。こんな處で殺されるのは本當の犬死だから、此方も怖かつたが、彼方もさぞさぞ怖かつたらうと思ふ。今その人は何處に居るやら、三十何年前、若い男だから、まだ生きて居られる年だが、生きて居るなら逢うて見たい。その時の怖さ加減を互に話したら面白い事であらう。

—福翁自傳—

橋 南 谿
名は春暉
京都の人
江戸時代の醫師
國學者
文化二年歿（年
五十三）

二〇 篤 實

橋 南 谿

余が諸國を巡りて、備後の國を通りし時、百姓と見ゆる年
老いたる男二人、ふと道づれになりぬ。山の名、里の風俗な
ど尋ね問ひて行きたりしに、その一人、我が野服を着て、方頂
巾を戴きたるを怪しみて、いかなる人にて、いづくよりいつ
くへ行き給ふか」と問ふ。「我は都方の醫者なるが、醫術修業
の爲に諸國を遊歴するなり。」と答ふれば、さても頼もしき御
人や。我等が住む里は向ふの山の奥なるが、親しき家の女
房に奇妙なる難病ありて、はや二年ふたまたになれるが、近きあたり
に住み候へば、聞くもいふせし。その家にて、も色々と醫療

尾道
廣島縣尾道市

盡くさざる事はなけれど、露ばかりの験もなく、今ははや命
危く見え候。かかる山深き片田舎なれば、名高き醫師も候
はず。あはれ、都近くもあるならばなど、親類の者どもは歎
き居り候。今日は圖らずも巡り合ひて、京都の御醫と承り
候へば、何とぞ脈ばかりにても取らせ給ひて、彼等が心をも
慰め給はらばや」と、誠の心言葉に出で、また餘儀もなく見
えたりしかば、余も「この道修業の事なれば、いと易き事なり」
とうけがひて、かの者どものしりへに従ひて、尾道の二三里
ばかり此方より、右の方に分け入りぬ。

鹿狼の通ふ如き細道を、谷に下り峰に上りて、行けども行
けども程遠きに、日影もや、傾きて、腹饑ゑ、足疲れたれば、僕

は腹立ちて、程も知れぬいたづら事」とつぶやく。とかうなだめて行く程に、やうやうに到り著きぬ。とある山あひのいと寂しき里にて本郷といふ所なり。

その家に入れば、病者は五十ばかりなる女にて、その夫を六兵衛といふ。案内の者しかじかの由を言へば、家内皆驚き悦ぶ。病者は、去年の冬より、難治の病に罹り候ひしが、次第に重りて、果は腹裂くる心地して、苦しみ譬へん方なく、日月月に病つものり、春の頃よりは一入にて、横に臥せば下腹一入裂くるが如く、立てば苦しく、坐すれば堪へ難し。それ故、晝夜唯火燵の櫓に兩手をつかへ、立ちながらうつむきてをる時のみ少し心安らかなる様なれば、春以來はかた時も

坐せず、臥さず、唯晝夜食ふにも眠るにも、この通りなり。その苦しみなかなか申すも愚かに候。近き頃は殊に悪しく候へば、命の限りも遠からじと、一日も早く臨終をとのみ待居り候。命の事は助かるべくも思ひ候はねど、都の人と承れば、ゆかしくこそ候へ。何とぞ一日なりとも、この苦しみを助け給ひて、横に臥して安らかに永眠するを得しめ給はば、上もなき御恵」と涙を流せる様、げに見るさへあはれなり。晝夜立ちてうつむきをれば、足は柱の如く、腫氣ありて、顔もまた眼ぶち腫れ、額も浮きて、生きたる人の如くにもあらず。一しきり一しきり腹はりくる時は、苦しみの聲隣を動かし、聞く者すら堪へかねたり。病體は誠にかくの如く危けれ

三原
廣島縣御調郡
淺野氏の舊城下

ど、その脈に見所ありければ、急ぎ薬を與へ、尙薬湯をもて腰より下を漬し、種々の療術を用ひしかば、やがて通利出で來て、始めて横様に臥す事を得たり。尙しなじなの療治を加へ、この以後に用ふべき薬方を委しく書きしるし、用ひ方などまでも細かに傳へ置きて、その家を辭して、數里の深山を分け出でて、三原の城下に着きぬ。三原にてこの物語をせしに、さても危き事なりき。御心に誠ありたればこそ佛神の助もありて誠の事に逢ひ給ふならぬ。かくの如き事は、多くは盜賊の詐る事にて、旅する人を人なき深山に連れ行き、刺殺して金銀衣類を奪ふ事珍しからず。この後は必ず粗忽のふるまひし給ふべからず。

六條
京都市下京區

と言ひけるにぞ、始めて心づきて、恙なかりし事を喜べり。それより諸國を巡り、二年を過ぎて京に歸りゐたりしに、或日六條の旅宿のあるじ訪ね來り、「二兩年以前、九州へ赴き給ひし御醫者は、こなたなりや」と問ふ。「いかなる用ぞ」と聞けば、備後の國より六兵衛といふ百姓一人上り來り候ひて、「下に市の字の附きたる御醫師を聞き及ばずや。何とぞ尋ねくれよ。去年しかじかのことにて高恩を受けたれば、御禮の爲に來りたり。その御名は聞かざりしかども、荷物のさげ札に市の字ありしを見覺えたり」と申す。手がかりもなき尋ね様かなと存じ候へども、その志殊勝にも候へば、先づ標札を見巡りて、市の字見當て候へば、お尋ね申すなり」と

東寺

言ふにぞ、その事あり。」と言へば、乃ち歸りぬ。その次の日、かの六兵衛、旅宿のあるじと同道し來りて、備後疊を自ら持ちて禮物とし、さても過ぎし年は不思議の御縁にて、妻なる者御療治に逢ひ、命はなきものと覺悟致し居り候ひしを、その日よりして驗を得、仰せ置かれし日限の如くに、さしもの難病も平癒して、再び常體の人となり候ひぬ。近所の者の行きあひより始まりて、御名さへ承らず候へば、弘法大師の來らせ給ふなりとのみ、一村にて評判致してこそ候へ。京を尋ねたりとも、逢ひ奉るべしとは圖らず候へども、命助かりし御高恩に、ひと言の御禮も申さざる心のうちも安からず、若し逢ひ奉る事かなはずば、東寺にても參り候ひて、弘法大

京都市下京區
眞言宗東寺派の
大本山

山路愛山
名は彌吉
靜岡縣の人
評論家
大正六年歿（年
五十四）

師様へ御禮申して歸るべしと存じ極めて參り候ひしなり。先づは尋ね當てて、日頃の本望を遂げ候。とて、眞實顔色に現れたり。余も嬉しくて、暫くもてなし慰めて歸しやりぬ。都近くの者ならば、百里に餘れる海山を、いかではるばる尋ねくべき。邊土の民の篤實なる事、感ずるにも尙餘りあり。

—西遊記—

二一 人物の大小

山路 愛山

世に大きな人物と小さき人物と云ふことあり。如何なる者が大きくして、如何なるものが小さきかと科學的に説明するは難儀なれども、兎に角大きなものと小さきも

佐野天徳寺
名は了伯
秀吉の臣
慶長六年歿

甫庵
姓は小瀬
徳川時代の假名
草子作者

ののある事は勿論なり。豊太閤はその中にて殊に大きな人物と見えたり。太閤小田原征伐の後、奥州に下向せんとて、途中にて佐野天徳寺を招き、信玄、謙信の様子を聞き、左様にはかをやらざる小刀利こがなきの武道にては、天下に思ひを掛くることは中々思ひ寄らざる事たる可きなり」といひたりと云ふ。小刀利の一句、信玄、謙信の事業を評し得て骨髄に達したりと云ふべし。二家ともに兵法に掛けては比類なき英雄ながら、力の入れ所が小さき所に局したるが故に小刀利なり。太閤は左様に小さき所に力瘤を入れず、恰も大風の吹くやうにはつとしたる行き方なり。甫庵太閤記に、天正十五年島津征伐の時、太閤既に肥後國八代まで進み、た



る事を記し、さて八代にて太閤一夜沈思しけるは、遠國のはてまで毫髪も残さず退治せんと思ふは小志なり。残る城は免しおき、急ぎ歸陣し、四方泰平の謀計に及ぶべしとて、或は一揆、或は仁俠せし僧坊、残さず御免なさるゝ條、罷出で安堵の御禮申し候へと、高札を立てしかば、これは寛宥の御下知かなと悦びあひつゝ、方々よりあつまり來り、御禮申上げんとて、門前市をなす事、恰も朝禮の如しと書きたり。萬事はかの行くことを主とし、

荒ごなしにこなし付けて、さらに小事に拘泥せず、大體より片付くるは太閤の筆法にして、これ則ちその大きな人物たる所以なり。大斧にて大割すべきものあり、小刀にて彫刻すべきものあり。小刀の彫刻は如何ほど精妙にても大木は斬り倒せぬものなり。信玄などの行きかたを見るに、國の仕置も巧みにして兵法も鋭けれども、精力を用ひる所謂片はしより堅めて行くと云ふ流儀なれば、人生五十の短生涯にては、とても天下は望むべからず。太閤はこれに反し、寛濶粗大萬事急ごしらへの普請なれども、その骨組は日本國を狭しとす。何物にも拘泥せず、何物にも頓着せず、怨みを忘れ、仇を思はず、人を嫉まず、人を恐れず、直截簡明唯

十月二十四日
天正十四年



徳川家康

大きな所より手を付けて大きな事を做すのみ。これその一代に卓絶してよく群雄を駕御したる所以なり。剛情者の徳川家を、色々の手段にて到頭京都に招きたる十月二十四日、家康入洛と云ふその夜、自身旅館を訪ひ、黄門かねて知り給ふ如く、秀吉今官位人臣を極め、兵威四海を席卷すといへども、もと松下某が草履取りて跟随せし奴僕とは誰か知らざらむ。やう／＼織田殿に見立てられ、武士の交りを得たる身なれば、天下の諸侯陽に畏服するがごとし

といへども、心より實に歸順する者なし。今被官となりし者共、元は同僚傍輩なれば、實の主君とは思はず。願はくは、近日表立たしく對面まをさん時はその心して給はるべし。秀吉に天下を取らせらるゝも、失はしめらるゝも、卿の御心一つにあり。このこと頼み奉りたくて、かく上洛をば勧め進らせたり。とて、徳川殿の背をたゝきたりと云ふ。徳川家もこの裸體的の率直なる白狀に對しては、唯依頼に應ずる外はあるべからず。他人ならば千里も迂廻して行く道を、太閤は極めて短き直線を取つて進む。禮儀も、作法も、遠慮も、人前も、彼が突進する脚下に蹂躪せらる。この時にあたりては赤心ありて權略なく、裸體ありて衣粧なく、眞實あり

て繩墨なし。規律に拘はらず、早く埒の明くを旨とす。左様にせんとて、わざと爲したりとて、人爲の跡見えては却つて滑稽に類すれども、この人は自然に斯様の大きな性格を備へたれば、群雄も遂にその下に服したり。――愛山文集――

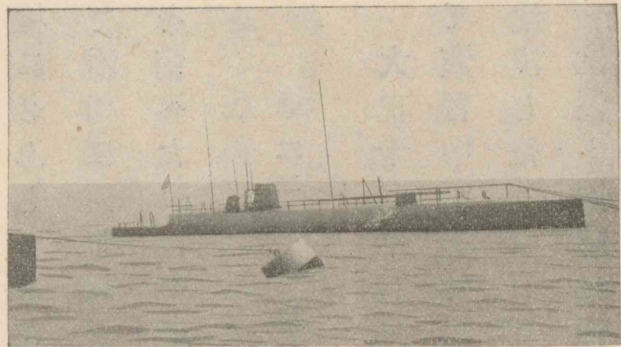
二二 潜水艦の沈没

福田 一郎

福田一郎
熊本縣の人
海軍少將

大正十三年三月十九日午前九時の頃、佐世保軍港外に於て演習中であつた第四十三潜水艦は、軍艦龍田と衝突して沈没した。

沈没と同時に浮上がつた彼の救難浮標内の高聲電話を取出して、直ちに艦内と通話を試みた。初の間は故障があ



第十四号潜水艦

つて話が出来なかつた。心も心ならずしてゐる内に、四時十分頃に至つて完全に通ずる様になつた。この電話は後部電動機室上のもので、前部の方の生存者の消息を知る機会を得なかつたのは、返す返すも残念であつた。この電話によつて得た後部の生存者十八名の消息は、真に悲壯・凄慘の極であつた。

午後四時二十八分頃、
「衝突した様ですから、發令所に命を聞きました、何等の應答がありません。それで電動機

を停止しました。機械室の者は衝突の音響を聞いて電動室に退去しました。電池の爆發と思はれる音を聞いてから艦内は眞暗になり、艦は左に五十度位傾斜しました。水がドン／＼浸入して來ます。」

これに依つて見れば、發令所の艦長以下は衝突と同時に斃れて、主水罐排水の號令を下す間もなかつたらしく、又その時から後部と發令所との連絡は全く絶えたらしい。

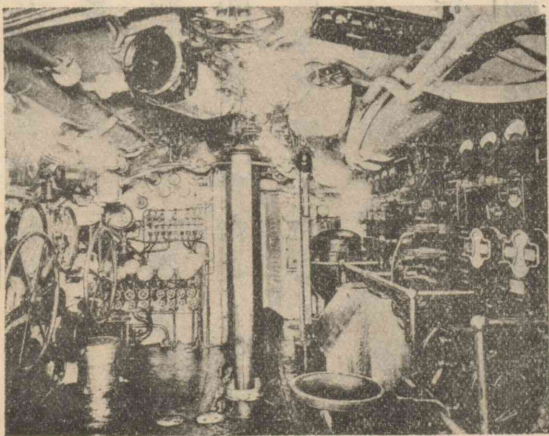
四時三十七分頃、

「呼吸が苦しくなつて、山に登るやうです。」

空氣は海水のために次第に壓縮され、その上酸素は段々減つて、炭酸瓦斯が段々殖えるばかりである。呼吸は分一

分と苦しくなる。その息苦しい呼吸の音が受話機を通じてありありと聞え、眞に聞くに忍びなかつた。受話機に就いてゐる者は殆ど堪へ得ないで、もう代つてくれ、もう代つてくれと、度々交代して辛くも聞取つたのである。四時四十五分頃、

「空氣清淨器が六箇ありますから、三人で一箇の割に分配し、交代でこれを吸つてをります。演習の前に買つて貰つた懐中電燈が二箇ありますが、それも段々弱くなりました。



司令發所

「兩舷電動機が浸りました。」
五時五十分頃、

「主水罐の排水の用意はしてあるけれども、發令所の元瓣が開いてないから、これを開いて下さい。」

小川機關大尉は水の中をジャブ、ジャブ渡つて来て、自ら電話に就き、苦しうな、併し落着いた口調で、

「小川機關大尉より司令へ。兵員は靜かに能く命を奉じて努力してをります。沈著に泰然として各自配置に就いてをりますから、くれぐれも司令から御上によろしく御願ひ致します。今足は海水に浸り、暗い中で働いて居ますから、少しでも早く救難の處置を執つて下さい。空

氣が悪くなつて、呼吸が大分苦しくなりました。」

六時四十分頃、

「今日中に揚がる見込がありますか、唯今何時ですか。」

暗中時間の経過が解りかねるので、時々時刻を聞く。そして既に夜間と聞いて、作業の様子が氣にかゝると見える。

「呼吸が苦しいから今氣蓄器の空氣をズリ／＼出して居ます。」

と言ふので、それは氣壓が高まるから、やめた方が宜しからう。」と注意すると、温順しく、

「それではやめます。」

と言つてそれを止めた。

七時三十分頃、

「天皇陛下萬歲」

を三唱するのが聞えた、随分強い聲ではあつた。市村機關中尉始め多數の勇士は、この時最期を遂げたのではなかつたか。

八時、穴見機關兵曹長の聲で、

「しつかり頼みます。上は暗くて作業が困難でせう。」

上には探照燈や月の明りが十分あると答へたので喜んだ模様であつた。

「皆遺書を書いて持つて居りますから、もう何も言ふことはありません。ドン／＼海水が増して胸まで來て居ま

す。炭酸瓦素が高まつて苦しい。もう二三人しか残つて居ません。

呼吸が非常に苦しいらしく、しつかり、しつかりと激励する聲のありくと聞えるのは、大方友達の死ぬときであらう。

八時十分、小川機關大尉は苦しい息の中から途切れ途切れではあるが、極めて明瞭に、

「一身上に關しては何もいふことはない、既に決心して居るから。皆様願はくは國家の爲に最善の努力を頼む。」と儼^{ゲン}として言つた。

八時三十八分、空氣の壓迫の爲に耳既に聾^ムして最早上か

らの話聲も聞えぬらしく、

「唯天命を待つ。」

と獨語するのが聞えた。これで上下内外の音信は全く絶えた。思へば僅かに百二十呎を距て、電話までかはしなから、遂に之を救助することが出来なかつたのは實に千秋の恨事である。

後、浮き上らせてから見ると、發令所には艦長心得桑島大尉中比良大尉町野中尉以下合計十三人が居たのであるが、衝突と同時に浸水したものと覺しく、何等處置を施す間なく職に殉じ、その面には何等苦悶の色を見なかつた。

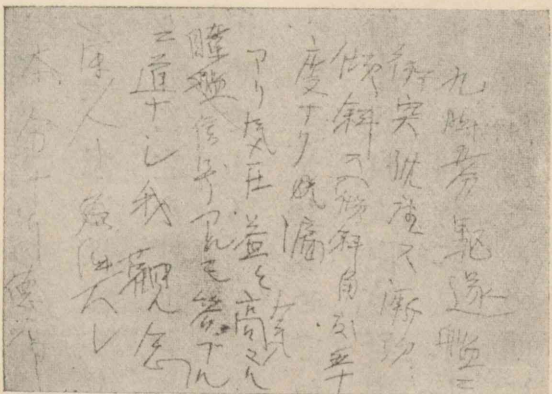
前部水雷室には、壁天井等十數個所にスクラッパー類を

スクラッパー

利泥器
又は軟い金屬を
削る器具

筆蹟

九時五分驅逐艦
二衝突沈座ス漸
次傾斜ス(傾斜
角度平度ナリ)
漏氣アリ氣壓益
々高マル瞭艦信
號アルモ答フル
ニ道ナシ我觀念
軍人ノ譽レ本分
ナリ



隊員の遺書

以て刻んだ立派な遺書がある。ここで斃れたのは十四人で、一人の士官も居なかつたが、一同心を一にして防水に全力を捧げ萬策盡きた後、從容として死を迎へたと見え、誰一人取亂した様はなかつた。二人の外皆遺書を懷にしてゐた。中にはその紛失を虞れて、數枚の紙に疊込んだ用意周到のものもあつたが、また更にこれを手拭に巻込んで額に鉢巻して居たので、滿一箇月の後殆ど濡れずに残つて居たものもあつた。

右の電話に依つて推察すると司令塔及び發令所は衝突の瞬時に浸水し、士官室と兵員室に居たものは何れも水雷室に集まり、兵員室はその後壓力の爲に昇降口が吹き上げられて浸水し、機械室の者は電動機室に退いて同室の機關部員は十八名となつたが、浸水の爲に氣壓高まり、炭酸瓦斯の増加が著しく、何れも人事不省に陥つて斃れたものと思はれる。然るに、かゝる苦しい間にも各、自若としてその部署を守り、上下一致して靜かに作業を續け、電話の話聲も少しも平常と異ならず、而も一言私事に及ばず、唯國と艦とのみを念頭に置いて、救助に關する注意を絶えず事細かに進言し、遂に人事を盡して天命を待つに至つたものである。

留取丹心
宋の文天祥の
「過零丁洋」の
詩の末句



河東碧梧桐
名は乗五郎
松山市の人
俳人

その沈着にして勇敢なる、眞に軍人の龜鑑で、所謂留取丹心、
照汗青とはこの事である。後日前部諸室を検すれば此處
には一名の士官も居なかつたに拘はらず、奮闘の跡は電動
機室にも増して目覺しく、然も初より艦外交信の途全く絶
えた爲に、各員心中の苦闘は思ひ遣るだに痛ましい。試み
に燭を乗つて水雷室を窺へば、艦壁影濕やかにして鬼氣の
人に逼るを覺えた。

―潜水艦の話―

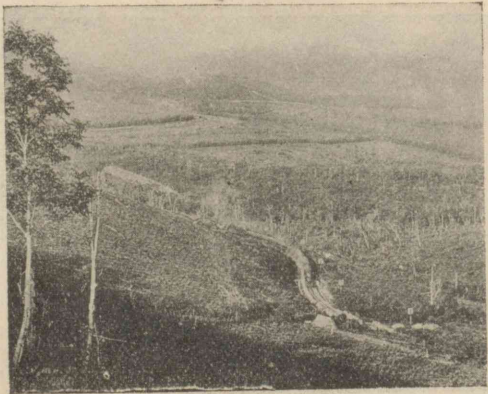
二三 日本新八景

狩勝峠

河東碧梧桐

「御展望の地の立札の前草を踏んで立つ。頭を半分そり

かけにしてやめたとしても言ひたい半面の草の山が、左の脚
下に、我等を迎へてゐる。谷に切り残された白樺の林は、喝
采するかのやうに、一様に葉をそよ
がせてゐる。草の中のたくましい
虎杖は、裏草を煽り續けてゐる。右
手の峠の頂は、一息に登り得る目と
鼻との間にありながら、雲の去來に
見えかくれする。
眼下に遠く横たはる神路山とか
いふ、さして愛嬌もない山を限りとして、六百方里の平原も、
今日は徒に雲漠々。



狩勝峠



鏡花小丈
名は鏡太郎
金澤市の人
文學者

十和田湖

巖の黒きとき、松明は幻に照らし、瀨の白きとき、釣舟草は窓に揺れた。

もとより幾處にも橋がある。皆

大木の根にかゝり、巨巖の膚を穿つ。

橋の彼方には、急流と奔湍とが大磐

石にせかれて、左よりさつと打ち、右

よりどうと潜り、真中に狂ひ立つ。

そのさまは、さながら藍と白と紺青

との三頭の獅子が荒れてゐるやう。

川の流は青黒い。波、波、波は三角に立ち、同じやうに動き、



十和田湖

泉鏡花



幸田露伴
名は成行
東京市の人
文學博士

華巖瀧

幸田露伴

さら／＼として、はてしなく流れ流れる。その寂しき、物凄さに、はじめて湖神の御影に接する思がした。

冬になつて氷雪の時にあへば、岩壁四圍悉く水晶とこほ

り白壁と輝いて、ただ一條長

へに九天より銀河の落つる

を看る。その美しさは、遙か

に夏季に勝るであらうが、今

は人をして萬斛の涼味に夏

を忘れしめ、飛沫、翠嵐を巻き、雷聲、白雲を起して、快く人を迎

へてくれる。この華巖の景を直寫しようとしたなら、千言、



華巖瀧



吉田 絃二郎
名は源次郎
佐賀縣の人
文學者

三千言の文を綴ることは、さしたる難事ではあるまい。

上高地

吉田 絃二郎



上高地

白樺の林の中を潜つて、焼岳の爆發の名残もまだ生々しい熔岩や枯木の間を飛びながら、池のほとりに出た。十三年前の焼岳の噴火の際吐出された熔岩が、梓川アヅガハの流を塞ぎ、山を焼いて作り出した大正池である。白骨のやうな白樺の幹ばかりが、焼け残つて池の中に林立してゐる。穂高の雪溪が岸では杜鵑ホトトギスが鳴き、老鶯がさへづ



(筆光弘澤中)

池正大地上

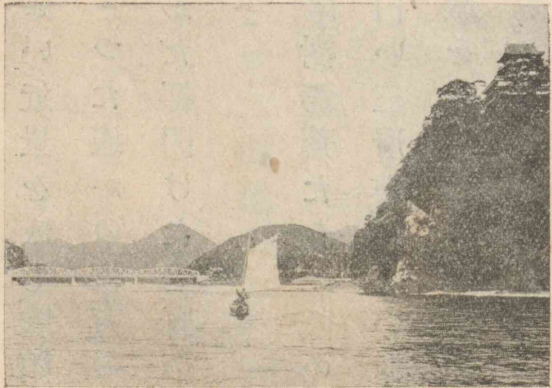
つてゐる。

川柳の下の影のさても静かなことよ。

木曾川

洋々たる木曾川の水、雨後の濁つて
凄じく増水した日本ライン、噴き
あがる亂雲の層は、南から西へ重疊
して、何か底光のする、むし／＼と紫
に曇つた奇怪な一脈の連峯をさへ
現出してゐる。その白金の覆輪が、
また何よりも強く眼を射たのであ
る。下流の右岸には、秀麗な角錐形

北原白秋



木曾川

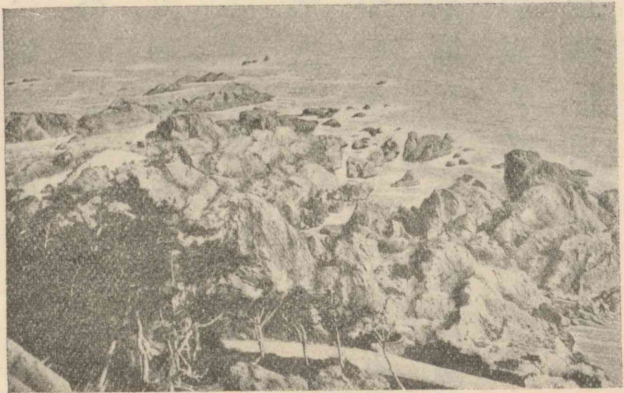
の山が、白い川洲の暖い彎曲線と程よい近景を成し、驟雨の最中であらうと思はれる、晴雲のかゝつた遙かの彼方の伊吹山あたりまでを背景に、廣々と霞んだ打開けた平野の青田も眺められた。

その右岸に犬山の城が見える。老樹鬱蒼たる丘陵の上に、粉壁鮮明である。小さく整つた白い三層樓、何といふ世にも美しい天守閣であらう。この城を得てこそ、木曾川の景勝ははじめて生きてくるのである。

室戸岬

田山花袋

南國のはてといふ感がひしと私に逼つて來た。いろいろと珍しい亞熱帯の植物のゆたかな緑——岬の一端を蔽



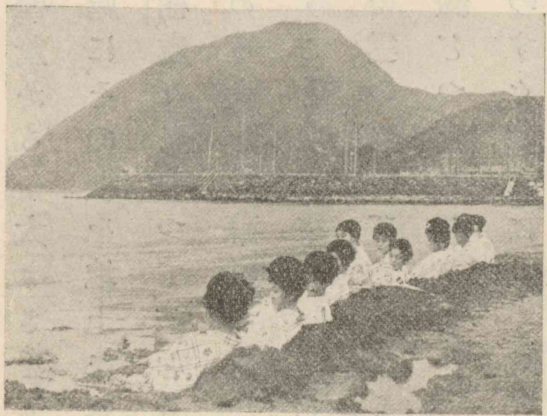
つてゐる梧桐の自然林、あたりに細く這ふやうに密生してゐる馬目櫟、驚かるゝ大ききをもつて、其處此處に、その枝を地上に落してゐる榕樹、處々に交つて、ひとりでに生えてゐる大きな蘇鐵。とても戸細かに記すことは出來ない。しかも、その緑の雲の靡いてゐるやうな岬の端を縁どつた、鐵色をした奇巖が並び、そのすぐ向ふに、白く碎けた怒濤が翻つてゐるといふことは、そのまゝ立派な一つの繪卷になるのではあるまいか。



名は清
松山市の人
伴人

別府温泉

海岸には砂湯といふものがある。これは潮のひいた時分にその砂濱に五體を埋め、下から涌出する温泉に浴するのである。日本人はもとより、西洋人支那人なども同じやうに砂に埋まつてゐる。そのみならず、この別府の海には底に數限りもなく温泉が湧いてゐるらしい。その證據には、海底の水が暖くて、熱帶地方の海にゐる美麗な魚や貝の類が棲息してゐる。それ

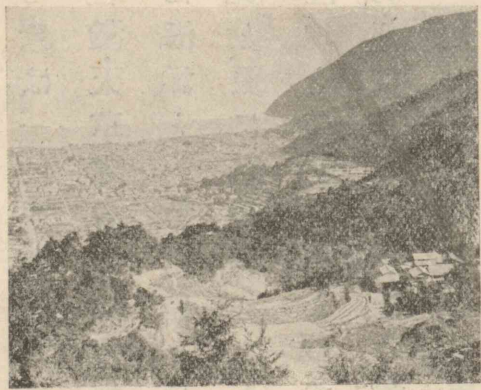


湯砂の岸海

日出
大分縣日出町

名は清
水戸市の人

らが採られて、この魚市場に出るとのことである。陸地に到る處に温泉の湧くことを思へば、それも無稽の説といふことは出来まい。のみならず、海水浴をするのにも、潮はあまりつめたからず、快適の溫度であるといふ。豊後灣の風光は美しい。ここから日出を眺めた趣などは、ナボリにながめに似てゐるといふ。



泉温府別

雲仙嶽

菊池幽芳

雲仙の第一峯は、東西南北いづれに面しても、優れた風光

文學者



雲 仙 嶽

に恵まれ、目に何等の遮るものもなき雄大無比の鳥瞰的光景を展開する。それは、實に雲仙が、他のより高き幾多の山岳に優越せる一大特色で、この特色は一に玄海灘・八代灣・大村灣・千々岩灘・天草灘・有明海等、幾多の區分された海洋と、天草諸島をはじめ多數の島嶼と、更に屈曲窮りなき海岸線を持つ陸地との交錯によつて地理的に變幻窮りなき地形が、その周圍に構成されてゐる賜に外ならぬ。私は海洋美と山岳美と相待つて、大風景を形作る雲仙の如き名山の、他にあることを知らない。

とを知らない。

—日本八景—

帝國新國文 卷四終

帝國新國文 卷四

昭和七年十一月一日印刷
昭和八年八月四日發行
昭和八年八月五日訂正發行

定價 金五拾六錢

編者 藤村作

發行者 東京市神田區西神田一丁目三
株式帝國書院

代表者 增田啓策

東京市牛込區山吹町一九八

印刷者 山本禎男

東京市神田區西神田一丁目三

發賣所 株式帝國書院

振替口座東京六七〇

關西販賣所 大阪市東區橫堀四ノ三

三宅莊藏書店
振替口座大阪六九

廣島市千田町三丁目
廣島縣立廣島工業學校



專修科一年

植本
豐

縣立工業學校

植本
豐

茨城無煙炭

Vertical text on the right page, likely bleed-through from the reverse side.

Faint grid structure on the right page, possibly a ledger or record book.

